

■ 特集1 2016年度先端社会研究所定期研究会・報告記録 ■

2016年度先端社会研究所第6回先端研セミナー（共催：社会調査協会）講演録

「ライフストーリーとライフヒストリー –『事実』の構築性と実在性をめぐって–」

講師／演題：

西倉 実季 氏（和歌山大学）

「ライフストーリー論におけるリアリティ研究の可能性」

朴 沙羅 氏（神戸大学）

「何が対話的に構築されるのか」

岸 政彦 氏（立命館大学） ※講演時は龍谷大学

「物語／歴史／人生 –個人史から社会を考える三つの方法–」

日 時：2017年3月14日（火） 13:30～17:00

場 所：関西学院大学大阪梅田キャンパス 1405号室

司 会：三浦 耕吉郎（関西学院大学）

○司会（三浦） それでは、定刻になりましたので、これから本日の公開研究会を始めたいと思います。最初に、この会の趣旨を話させていただきます。関西学院大学の三浦と申します。

今日のこの会は、社会調査協会と関学の先端社会研究所が共催で行うことになりました。社会調査協会のシンポジウムや公開研究会はこれまでもっぱら関東で開催されてきましたので、初めて関西で行うというのは歴史的な出来事となるようです。それから、関学の先端社会研究所で言えば、その研究所の中のソーシャル・ディスアドバンテージ班というのがこの受け皿になっております。

ソーシャル・ディスアドバンテージ班というのは一体何かというと、マイノリティ研究に掉さすのですけれども、従来のマイノリティ研究が、人とか、あるいは量的な面でマイノリティを規定する側面があったのにたいして、質的な面でマイノリティの人たちがどんなディスアドバンテージを抱えているのかという点に着目しています。すると、そういうディスアドバンテージは実はマイノリティじゃない人だって抱えていたりするし、それから一口にマイノリティの人と言っても、幾つものディスアドバンテージを抱えている、ゲイで、HIVで、薬物依存症みたいな、そういうふうな人たちのソーシャル・ディスアドバンテージを質的に研究するというような野心のもとで活動している研究班です。ですから、実は今日ご登壇いただくお三方も、その研究内容で言えば、まさにソーシャル・ディスアドバンテージを研究されてきた方と言うこともできるだろうと思います。

そうしたなかで、一番の歴史的な意義としては、ライフヒストリーとライフストーリーという研究を行っている人たちが、ここに集って、開かれた対話の場がつけられたということだろうと思います。結果はどうか分かりませんが（笑）。

この会の前哨戦といいますか、プレペーパー的なテキストが『現代思想』の3月号に掲載されています。その『現代思想』におけるスタンスは、どちらかというとやっぱり構築主義対実証主義みたいな、そういうふうなありきたりな対立軸しか提出されていなかったという中で、今日はそれと

は違う切り口でこの論争をぜひ見ていくことができるのではないかと考えております。

その切り口というのは、副題を見ていただければわかると思うんですが、「事実」の構築性と実在性と書きました。これは何を言っているかといえ、もう簡単に言えば、我々が事実と呼ぶものの。これは人によって随分違うし、研究者によっても違うんですけど、その事実というのは常に実在性と構築性をあわせ持つてものじゃないですか。それを対立的に今まで捉え過ぎていたきらいがありました。でも、それはやむを得ないと言ったらやむを得ないのであって、なぜなら、そういう主義があると、どうしても主義者は必ず自分の立場を死守しようとして、両方があるよね、という議論はしにくくなるからです。

例えば私の研究している部落差別という領域は、まさに事実の構築性と実在性というのを見ていく上ではすごく重要な領域です。例えば同和地区という言葉がありますね。これは行政用語なわけですけど、私が研究している兵庫県と福岡県はどちらも同和地区があります。行政があると言います。それに対して、大阪府や京都市は、同和地区というのはもうありませんと、あるとしたら旧同和地区ですという。

これは一体どういうことなのか。ある県では同和地区があり、ある府ではもうありませんという。これは同和对策事業特別措置法というのが失効したことに対する行政の解釈の違い、それがこういう現象を生み出している。でも、これ、同じ政策的な土俵の上で「今もある」とか、「かつてはあったけど、もうない」とかいつているわけですから、これはやっぱり実在性の問題でもあり、構築性の問題でもありますよね、というようなことを私は考えておりました。

それからもう一つですけど、事実という言葉をかぎ括弧で入れておりますが、この点についても、私は本当は企画した側として余りにも無造作に事実と言い過ぎたかなと思っていて、これはまた朴さんや西倉さんからいろいろな異なった事実観みたいのがきくと出てくると思うんですけど。私の認識では、歴史的な事実と、それから日常的な事実というのは、やっぱり事実と一言言っても位相が違うだろうと思うんですね。

それで、私事ですみません。昨日、うちの飼ってる犬の後ろの左足、ちょっと麻痺しちゃったみたいだったので、動物病院に連れて行って診てもらいました。ちょっと原因がわからなくて、今、大変心配なんですけれども。例えば、僕がペットを動物病院に連れていったのは日常的な事実ですけど、歴史的な事実とはあんまり言いませんよね。

だけでも、実は関西圏に犬の奇病が潜在的に生まれようとしていて、その奇病の第1号がもしかしてうちの犬だったということが後からわかると、その奇病が認識された第1号ということで歴史的な事件になる。ちょっとこじつけかもしれませんが、そういう意味の歴史的な事実と日常的な事実って何か違うんじゃないか。

もっと言えば、朴さんは吹田事件という歴史的な事件を今日言及されます。そして、西倉さんは顔にあざのある女性のリアリティということに言及されるんですけど、その吹田事件は歴史的な事件ですが、顔にあざのある女性のリアリティというのは、はたして歴史的な事実だろうかと思うと、やっぱりちょっと違うんじゃないかなとか。あるいは、事実と言ったときに、研究対象としての事実と、それから研究、その事実を説明したり、記述したりするために用いられる証拠とかデータの事実性は、またちょっと位相が違いますよね。

ということで、事実というものの意味を幾つか分けて考えたほうが、今日の話は聞きやすいかなと思います。けども結局、今、原発事故なんかを見てみると、結構、事実なんて本当にわかんないところで、この世の中は物事が議論され、そして決定されている。つまり、一体2号機の中はどうなってるかわかんないし、原発事故の原因がわからないのに、何かもうその事実がわからないまままで社会がどんどん動いていくみたいな。そういう意味で、事実というのは、本当はすごくわかりにくいもの、捉えにくいものなんじゃないかなんていうことも僕は思うんですけども。とりあえず、そういうふうに事実という言葉遣いのそれぞれの登壇者の違いに注目していただければと思います。

それから最後の3つ目なんですけど、最近やっとわかってきたのは、構築主義とか実証主義という問題じゃなくて、片や、例えばライフストーリーという、そういう研究をする枠組みみたいなものの、ある意味でこれは一般化された理論枠組み、だからかなりゼネラル・セオリーに近いような、一般理論に近いような形でライフストーリーが展開されてしまうことに対する、うめきのような違和感というものが一方で表明されている。

それに対して、片や、今度は研究結果について、それを過度にまた一般化して、割と単純な形で、この調査の結果はこうですというような、そういう仕方の研究結果の一般化に対する、やっぱり大きな疑問みたいなものが一方ではふつふつと存在しているという。恐らく、このあたりが一番この議論の社会的意味のある部分じゃないかなというのが僕の仮説的な、僕なりの見方ですということまでを最初に申し上げて、あとは、お三方からどんな話を聞けるか楽しみにしていきたいと思います。

それで、大体1人30分話していただいて、そして次の5分、非常に簡単な質問を受けます。それをお三方繰り返します。そして3時半ぐらいになりますので、そのときに手元にある質問用紙に質問を書いていただいて、そしてできたら3時40分前ぐらいまでに提出していただきたいと思います。ですから、1番目の人、2番目の人が発表されたら、その発表されてる途中でそれぞれ質問を書いていただければいいし、ただ数が多いですから、できるだけシンプルな形で質問を書いてください。

それでは、まず1番目の発表者、西倉先生、よろしくお願いします。

## ライフストーリー論におけるリアリティ研究の可能性

西倉 実季

(和歌山大学)

○西倉 皆さん、こんにちは。西倉と申します。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

その前にちょっと、電車が今日事故でとまってしまっていて、ぎりぎりに到着しまして、レジュメの件では皆さんと会場の方に御迷惑おかけしました。申しわけありません。

それでは、「ライフストーリー論におけるリアリティ研究の可能性」というタイトルでお話しさ

せていただきます。

先ほど三浦先生から、ライフストーリー研究が一般的な方法、ジェネラル・アプローチとして流通していくことに対してかなり違和感が持たれているんじゃないかという問題提起をいただいたんですけども、私からは、それに答えるようなことを意識したいと思います。決してジェネラル・アプローチではなくて、データの特質とか分析しようとしているものとの適合性、研究する側の意図があって初めて生かされる方法ではないかというのが基本的な私の姿勢です。ですので、少なくとも私はこういうところにこのアプローチの有効性を見てきたということが発表の中心になると思います。

それではレジュメに沿ってお話しさせていただきますが、「はじめに」のところでは、私自身の調査研究の経緯を少し紹介させていただきたいと思います。

私は、先ほど御紹介いただいたんですけども、顔にあざがあるとか、あとは脱毛で、髪の毛、あるいは全身の毛がないとか、容貌にあらわれる病気やけがを持った人たちの困難経験を聞き取りしています。後ほど詳しく触れますけれども、最初、私はフェミニズム研究から出発しているので、そういった経験をジェンダーの枠組みで考えようというところから出発しました。

ところが、調査をしていくうちに、語られていることを理解する上でそれが適切な枠組みではないということに気づいていって、今は差し当たり障害という枠組みを使っていますけれども、これにも当てはまらない語りが出てきているので、更新されていくことになるのかなと思っているところです。現在のテーマは、調査の方法というよりも、障害者の包摂を促すような制度が進んでいく中で、誰のどういう経験がそこからこぼれ落ちるのかということを障害学の枠組みで考えているのが最近の研究です。

それで、私はどうしてライフストーリー研究をしたのかですが、最初からライフストーリー研究をしようと思ってしたわけではなくて、途中でこの方法に有効性を見出したということになります。

「ユニークフェイス」といって御存じの方もたくさんいらっしゃると思うんですが、レジュメの3ページの下の方注の2番に載せています。1999年に発足した、例えば顔にあざがあるとか、「病気やけがなどが原因で、機能的な問題の有無にかかわらず、明らかに『ふつう』と異なる容貌をもつ人たち」のセルフヘルプグループです。私はこのセルフヘルプグループと出会ったところから研究をスタートさせているんですけども、そのとき起こったことがプラマーが「ストーリーの社会学」として描いたことと非常に似ていました。これまで語られなかった新しいストーリーが語られ始めて、その人たちのアイデンティティとコミュニティが相補的に立ち上がってくるのを目の当たりにしたことで、ストーリーの社会学、もっと言うと「共同行為としてのストーリー」という視点を手にしたという経緯があります。これは、ライフヒストリーを聞く人は第二のストーリーの生産者であって、語られるストーリーの性質を変えるほどの重大な役割を果たしているんだという着視点です。

2つ目に、この問題は不可視化されてきたので、文字に書かれた資料や統計のデータがほとんど存在しませんでした。パーソナルドキュメントに関しても、語り手が非常に若い人だったということもあって、口述の語りを重視していくしかなかったという事情でライフストーリー研究に進みま

した。

それから3つ目ですけれども、顔にあざがあるという問題をめぐって、語り手と調査者である私の中で、その問題の捉え方が決定的に違っているという調査経験を何年も続けていて、後で見るAさんへのインタビューが1つそれに当たります。ですので、インタビューの語りは、語り手と聞き手の相互行為を無視しては理解できないんだということを身をもって実感した経緯があります。そこから、語りがどういうふうに語られているのかという「語り方」に注目するライフストーリー研究に意義を見出したことになります。

レジュメの2番目では、ライフストーリー研究の基本的な視点、ライフストーリー研究といってもかなり広いですので、私がどういう視点に立っているのかを簡単に説明させていただきたいと思います。

ライフストーリー研究がもともと何を乗り越えるべきものとして登場したのかを少し学説史的に引きの姿勢で見る必要があると思いますので、ライフヒストリー研究から説明しています。ライフヒストリー研究は、中野卓先生が「個人の社会的調査研究」の必要性を当時の社会学に対して問題提起したものと捉えています。

ライフヒストリー研究が有効性を発揮する領域として、これは多くの論者が言っていることですが、個人の主観的な現実、その人が自分を取り巻く世界や人生をどういうふうに見ているのか、主体としての見方に注目していくということがあります。これは、語り手から独立した、過去に本当にあったことをそれまで追究してきた立場との差異化が図られていると思います。それから、過程であるとか生の全体性を捉えることが志向されています。

このあたりはライフストーリー研究も継承していると思うんですけど、過去の出来事や経験を語ることは、事実をありのままに再現することではなくて、あくまで語り手がその現在の観点からしている過去の再構成であるという捉え方がされるようになりました。ライフヒストリー研究もこの視点は持っていたと思うんですが、ただ一方で語られた生が実際にその人が体験した生と対応しているかどうかを重視していたところもあると思います。

それに対して、ライフストーリー研究は、生活としての生、経験としての生、語りとしての生というふうに、これはブルナーの生の3様態ですけれども、それらを区別して考えました。その中でも語りとしての生に注目して、かつそれを語り手と聞き手との相互作用の結果生まれてきたものとして分析する視点だと思います。

こうした立場に立ったときに、ライフストーリー研究の代表的なものとして桜井厚先生の対話的構築主義があり、私自身もその立場をとっていますけれども、その立場から桜井さんが幾つか概念を提起されています。その1つが、語りの2つの位相という考え方です。出来事がプロットによって構成されている語りである「物語世界」と、語り手と聞き手の相互行為があらわれている次元である「ストーリー領域」に区別しました。

ただ、この区別自体は難しく、どんな語りでも簡単に区別できるものではないということは桜井さん自身がおっしゃっています。あとは非常に誤解されて流通したと思うのは、「何が語られたか」から「いかに語られたか」への転換として理解されてしまったところは違うと思っています。「何が語られたか」を検討するために、「いかに語られたか」を切り離さないで見るが必要だと

いう問題提起だったはずですが。

こうした観点は対話的構築主義に限りません。これは三浦先生が論文でかなり早い時期に、語られた事柄から事実を特定しようとする試みは難しいけれども、「語り方」という点に着目するとすれば事情は変わってくるということを指摘しておられます。事実の特定にとっては制約でしかなかった語り手による過去の再構成や自分を合理化するような語りそれ自体が、その人の生を理解する上で新たな視野を広げてくれるという指摘があります。

こうした視点をとっていることを前提にして、私自身がライフストーリー研究のどこに有効性や可能性を見出したのかお話をしたいと思います。これに関してはやはり自分の調査の経験からしか言えませんので、レジュメの3番目は自分の調査のデータになっています。1つ目の例は、異なった見方の間の衝突やずれが非常に顕在化したやりとりを持ってきています。それに対して2つ目に提示するほうは、聞き手と語り手双方にとって、語り手の経験への理解が深まったと思えるようなやりとりを持ってきています。

1つ目は、私の調査経験にとって転機になったAさんへのインタビューです。最初に少しお話ししましたが、私自身は最初、顔にあざのある女性たちについて、女性であれば誰でも経験しているはずの外見の美醜をめぐる問題経験がその人たちに凝縮されてあらわれているんじゃないかという想定を持ってインタビューを始めたわけなんです。

ただ、こちらは女性としての経験を、男性とは違うはずの女性としての経験を語ってほしいのに、例えば自分の経験を語る上で男性の語り、具体的には自分より先に語り始めた男性の語りを自分の経験を整理する上でのリソースにしたりだとか、あとは「この問題は男女関係ないんですよ」とおっしゃったりだとか、どうにもかみ合わない調査が何回も続いていくということを経験しました。

そのうちに、彼女たちの経験を美醜をめぐる問題経験として理解していくのは適切なのかどうかはわからなくなって、2年半ぐらい調査ができない、しないという時期がありました。次に提示するのは、久しぶりに実施した調査で、何年もかけてようやく、こういうことだったのかと腑に落ちる瞬間が訪れる、そういうきっかけになったインタビューです。これに関してはレジュメの5枚目と6枚目に実際のトランスクリプトを載せていますので、資料として御参照いただきたいと思います。このやりとりを大体3つのパートに分けて、①②③と番号を振っています。それに対応させてレジュメのほうにも番号を振っています。

1番目のやりとりのところでは、私が顔だちの美しさに言及しながら質問しています。これに対してAさんは、女性にとっての顔だちの問題は確かに深刻な問題だけれども、それと私たちの顔にあざがあるという問題とは違うと語っています。その「違う」という判断の根拠になっているのは、他者から度を越した視線が向けられるかどうかです。

2番目のパートでは、顔にあざがあることはハンディの問題であるのに、社会的には美醜の問題とごっちゃにされているということをAさんが指摘しています。その混同されていることの根拠として挙げられているのは、身体障害者と比較して、顔にあざのある人には社会的な配慮が、身体障害者に払われているような配慮が全く払われていないではないかということです。

3番目の場面では、ハンディと思っていたら、例えば顔にあざがある人をメディアが悪役として

描く、あざを悪の象徴として使うような描写はしないはずだということを A さんが言っています。私は、そこに彼女が言いたいことが集約されているんじゃないかと考えて、だから「ハンディ」の意味をもう一回確認しようとしたわけですが、彼女はそのハンディについてもう一回説明するかわりに、カモフラージュメイクというのはあざを隠すお化粧のことなのですが、それを実際にやってみることを、「じゃあ、顔を赤いマジックで塗って外を歩いてみてください」と提案している、そういう場面です。

これを、先ほどの「語り方」に注目して分析したときに、インタビューの場で語り手と聞き手のリアリティ定義、顔にあざがあることをどういう問題として捉えるかにかなりずれがあることがわかってきます。語り手にとっては普通かどうかの問題、つまりハンディの問題なんだけれども、私は美醜の問題として聞いていたというようなやりとりです。

これを私自身は語り手がふだん生きている世界が社会調査の中に凝縮してあらわれた、そういうやりとりとして捉えました。というのは、A さんは自分の問題が周りの人にこれまでさんざん否定されてきた経験を語っているわけなんですけど、つまりハンディの問題を美醜の問題として認識されて、良くて軽視されてきた、悪くて全く存在しないものとされてきた経験を語っているそのインタビューの場で、聞き手である私がその問題経験を、同じように美醜の問題に回収して否認していたということへの気づきがあったからです。

このやりとりは、聞き手だけではなくて、私の背後にいて私が研究の宛先にしている人にも向けられています。例えば A さんは、「西倉さんもそうなんですけど、皆さんそうなんですけど、美の問題と捉えるんですね」という形で私の研究の読者を想定されていたと思うんです。そういった読者も含めて、顔にあざがあるというリアリティ定義の変更を求めるクレーム申し立てとしてのインタビューと捉えられるのではないかということです。これは、語りが単なる事実を伝達するための乗せものではなくて、語ることそのものが1つの振る舞いであると考えられるような、そういうやりとりだと思っています。

それから2番目の例ですけれども、これは一番最近に実施したインタビューなので、まだきちんとした解釈ができていないんですけども、聞き手と語り手双方にとって語り手の経験への理解が進化していくような、そういうやりとりの一例として持ってきました。

B さんは、脱毛症の経験をギャグ漫画で表現している漫画家です。それまでフィールドにおいてみられたのは自分史を語るという自己の表現の仕方だったんですけども、最近、例えば漫画で自分の経験を表現するとか、芝居で表現するという新しい表現が出てきているので、それに関して調査をしたいと思ってやっているところです。

このインタビューは、ギャグ漫画の「笑い」をめぐる複数のリアリティが立ち上がったことを示したい、そういう例として持ってきました。インタビュー全体を通して繰り返し語られたのは、脱毛症という問題を当事者ではない人に笑いながら理解してもらいたいということでした。なぜ笑いが重要なのかというと、特に女性の髪の毛がないという状態が余りにも悲惨に受けとめられてしまい、問題に暗さが伴ってしまうので、それを払拭したいということでした。そのためには笑いが重要なんだとおっしゃるんですね。ただ、インタビューの最後で、ふいに、「でも私には笑いだけを期待されてしまっているんですね」ということが語られました。笑いをめぐって違う意味が出

てきたということなんです。

このインタビューでは、1回目のインタビューだったこともあって、Bさんのこれまでの経緯を聞き取ることに集中していました。先ほど言ったように、フィールドでの新しい表現、新しい自己語りのあり方としてBさんをインタビュー対象者に選んだことを説明して調査を始めました。そういうこともあって、途中Bさんは、脱毛症の経験を笑いで表現するなんて、私（調査者）が今までインタビューしてきたほかの人とはかけ離れてますよね、だからちょっと共感できませんよね、という言葉は私に向けてくるという場面が何度かありました。インタビューの終盤、Bさんによるトピックの切りかえによって、私がなぜ「見た目の問題」の研究をするのかに話題が転じている場面が資料の2番目のやりとりです。これも先ほどと同じように大体3つの場面に分けられると思って番号を振っています。レジュメの①②③もそちらに対応しています。1番目ではなぜ研究するのかというBさんの質問に対して、私は「見た目の問題」は社会的な問題なんだというふうに、かつてユニークフェイスが問題提起したわけですけども、そのことに触れながら答えようとしています。

これはどういうことかという、ユニークフェイスの人たちのつらさの原因が社会の側の排除であるとするならば、それは社会学のテーマだと思ったということです。疾患という枠組みではなくて、排除や差別の問題として考えるべき社会的な問題だと思ったという応答をしているつもりです。

2番目のやりとりは、調査者がなぜ研究するのかというトピックから微妙にずれているのですが、私の応答を受けて、Bさんが「見た目の問題は社会問題なんですか」という質問をしているところなんです。

私は、これまでの調査の中で得ていた知見、その問題を体験している人たちの苦しみや、あるいは時に存在さえも社会的には認識されていなくて、その認識されていないことが問題として積み重なっていくような、そういう困難経験があるんじゃないかと捉えていたわけなんですけども、その知見を踏まえて、「見た目の問題」の当事者のつらさを身体障害と比較して過小評価するような社会のあり方の問題として説明をしています。

それを受けてBさんは、問題を過小評価されるそうした生きづらさの実感があるんですよという形で、たかが髪なのにとわかって読者や編集部には自分の作品が受け入れられないんじゃないか、そういった懸念から、本当につらいことを描けないまま笑いだけを期待されてしまっているんだということを語り出しているところです。Bさんが作品を連載している雑誌にはほかに「病気もの」が掲載されていて、そちらはちゃんと問題を語れているんだという対照もなされています。

このやりとりを先ほどの「語り方」から見えていくと、聞き手の応答が、語り手が過去の経験を解釈するときの新たな枠組みというか視点を提示している、そういうやりとりではないかと思っています。

過去の経験がどういうふうに解釈し直されたかを見ていきます。リビング・ライブラリーというイベントがあるんですが、Bさんがそれに参加したときに、ほかの参加者に比べて自分の問題がすごく軽いように感じてしまったということでした。来場者からも、「髪の毛がないだけで何がそんなにつらいのか」とか、「まあ本人にとっては大問題ですよ」という形で反応されて、そのとき



は髪がないことは本当に悩むに値することなのかなと考えてしまったそうなんですけども、この場面では、社会問題のはずなのにそうはなり切れない問題という観点から解釈し直されています。

以上の2つの例を踏まえて、私がライフストーリー研究のどこに可能性を見出しているのかということと、あとは課題に関して少しお話ししたいと思います。

私は、やはりインタビュー過程や、あとは個々のインタビューだけではなく調査過程全体に対して反省的な思考をするところにライフストーリー研究の特徴があると思っています。その反省というのが自己目的化して捉えられがちなのところがあるんですけども、そうではなくて調査者の構えを反省的に捉えて、その反省を通じて組みかえられた構えのもとで、もう一回語り手の語りを見ていくということです。

つまり、先ほどの整理で言えば、物語世界をもう一回見ていくことが重要だと思っています。そうすることで、今まではあまり意味があるとは思っていなかった出来事が、語り手の経験を理解する上で非常に重要な出来事だということがわかってきたり、あるいは、ばらばらに語られているように見えていたものが、出来事同士の連関がはっきり見えてくるということがあります。

この意味では、調査者の構えの変化というのは、後ほど岸先生から前提であって結果ではないというお話があると思うんですけども、確かに前提というか、もう一回新しい解釈をするための出発点であって、結果ではないというのはそのとおりだと思います。

もう一つ、調査者の構えを明らかにしながら、調査者と、場合によっては調査の協力者の変化をそのプロセスに沿って捉えられるところにも可能性があると思っています。これは先ほどの例で言うと、Aさんの場合は、リアリティ定義が非常にずれていたところから、どういうプロセスをたどって共有できるところまで至ったのかを記述していくということです。これは調査協力者について調査者が理解したことだけを書くのではなくて、なぜそういうふうに理解するのが妥当なのか、どうしたらそういう理解にたどり着けたのかを書くということです。書くということは、ほかの人に向けて呼びかけるとのことだと思います。つまり、語り手と聞き手が共有したリアリティを、ライフストーリーの作品を読む人、読み手にとってのリアリティにもしていこうとする、そういう試みなんじゃないかと考えています。ライフストーリー研究のこうした記述のスタイルはそれを意図しているのではないかと思います。

私にとってそれが重要だったのは、フィールドの変化に伴って、私に対しての視線が変わってきたということがあります。問題が不可視化されていて誰もこの問題に注目していなかったときは「研究してくれる人」として歓迎されていたんですけども、何度も訪れるうち、あるいは問題が徐々に日の目を見て複数の専門家がかかわるようになってくると、医学や心理学やメイクの専門家がかかわってくるようになると、じゃあ社会学者は何をしてくれるのかというような問いかけが私にとって非常に切実なものになりました。ですので、差別問題に対して、ライフストーリー研究はどういう実践性を持つのかを問わざるを得ないところに立っているということです。微力ながら何かしらの社会的な知見をフィールドに埋め戻していくことが必要になってきたという経緯があります。

それから、「複数のリアリティをめぐる」というところは、矛盾しているように見える語り、例えばBさんのような場合ですけども、それはインタビューの流れに結びつけて考えることで十

分理解可能なものになります。

これは1つの出来事に対してバージョンのある語りとも言えますが、私たちは反復される語りに注目が行きがちです。反復される語りというのは1つの意味が強調される語りだと思うんですけども、そうではなくて、バージョンのある語り、つまりいろいろな意味で語り直される経験に注目することで、人生とか経験の豊かさや複雑さを見出していくことができるんじゃないかと考えています。

ただ、このところはまだライフストーリー研究においてもリアリティの多元性という指摘にとどまっていて、その多元性を見ることで人生の理解にどう役立つのかはもう少し議論を積まなければいけないところなのかなと思っています。

すみません、ちょっと時間がなくなってきましたんですけども、もう1つ、これはライフストーリー論に対しての批判を多少意識しています。ライフストーリー研究はストーリーの研究であってライフの研究ではないという批判をいただくことがあるんですが、先ほど私が言ったように、社会調査の中に語り手が生きる日常が縮図的にあらわれるとするならば、インタビューの場を見ることが単にストーリーの研究で終わるだろうかということです。調査者と調査の協力者が互いにその時々の問題関心を持ち寄って調査という出会いを果たしているわけです。だとするならば、その場を見ることが単にストーリーの研究で終わるはずはないと考えています。

それから、語りとしての生と生活としての生を区別することはそもそも難しいのではないかと思います。これはデータにもとづいてはまだ言えないんですけども、こういった論点もあるのかなと思っています。

最後に、事実をめぐる対立軸はどこにあるのかということです。先ほど三浦先生から、余りに無造作に「事実」と言い過ぎたというお話があったんですけども、さしあたり、語り手と聞き手の関係から独立して何か1つの事実があるという意味でその「事実」を捉えとします。そうした見方に対してライフストーリー研究は、先ほど提示した生の3様態であるとか、物語的真実というような概念を通じて、そうした「事実」の見方では捉えられない語り手のリアリティがあるはずだという問題提起をしてきたはずなので、もう一度この構図に引き戻されるのはどうなのかなと思うところがあります。どうなのかなっていうのはちょっと曖昧なんですけれども、この対立軸を対話的構築主義のほうを立てていると言われるときがあるんですが、でも、そうだろうかと思うわけです。この対立構図は一体誰が立てているのかが、私自身はちょっとわからないというのが正直なところなんです。

それから、ライフヒストリーなのかライフストーリーなのかという問いは、これはあまり意味がないのではないのでしょうか。その次の佐藤健二先生からの引用は、どれだけデータの特質に合った分析を組み立てられているかが問われるべきだという指摘です。この引用のとおりだとしたら、重要なのは、自分が持っているデータの存在形態に対して検討を加えていかなければいけないということだと思います。

私自身は、先ほど提示したような調査経験から、「語り方」から「語られる内容」にもう一回アプローチしていく方法が有効だと考えているんですけども、ただこういった方法が生きてくるのは、データに語り手と聞き手の共同行為のあり方が、はっきりその跡が残っているようなものに限

られるのではないかと思います。そもそも口述の語りでないものもあります。ただ、どんなテキストにもその宛先はあるという意味で、そこに共同行為を見ていくことは不可能ではないのかもしれませんが。あるいは口述の語りであったとしても、聞き手の側が全然質問していないようなモノローグ的なインタビューであれば、この方法は生かせないのではないかと思います。

「事実」に関しては、先ほど三浦先生から整理があって、いろんな水準で使われていて、恐らくこれから御発表いただくお二人の中でも違うし、私が想定している「事実」という考え方とも違うように思っていますので、そこは後ほど少し整理できたらいいなと思っていますところですよ。

すみません、ちょっと時間オーバーしました。以上です。

○司会（三浦） ありがとうございます。

それでは、5分ほどということで、ちょっとこのことについて確認したいとか、そういうレベルの基本的な問いがありましたら手を挙げていただければと思いますが、いかがでしょうか。

特にない。わかりやすい発表だったということで、よろしいでしょうか。

じゃあ、ありがとうございます。

そうしましたら、次に、朴 沙羅さんをお願いしたいと思います。テーマが「何が対話的に構築されるのか」。社会調査における事実をめぐるということをお願いしたいと思います。

## 何が対話的に構築されるのか

朴 沙羅

（神戸大学）

○朴 すみません、子供を預けるところがなく、子連れになってしまって、お見苦しいところをお見せします。

はじめまして。神戸大学の朴 沙羅と申します。去年の10月から神戸大学で働き出しまして、博士論文の間は太平洋戦争直後に日本の周辺で移動していた人や物、お金のデータを集めるという調査をしていました。博士論文の後はちょっとばたばたしてたんですけども、最近は重国籍の人たちが日常的にどういうトラブルに直面していて、例えばパスポートを更新するときどうするんだとか、あるいは結婚して子供が生まれたとき、届けを出すのか出さないか、そういったことを聞き取ったり、それからいわゆる慰安婦問題の被害者を支援してきた人たちにとって、昔の出来事が本当であることはこの人たちにとってどういうことなんだろう、ということをインタビューしたりしております。

本日の問いと答えなんですけれども、この事実というものに関して、先ほど三浦先生がおっしゃった、歴史的な事実と生活の中の事実という区分が有効であるのか否かも含めて、事実というものとデータ、あるいは語りとの違い、そして物語世界とストーリー領域を概念的に分けることや、先ほどの西倉先生のご発表で言いますと、関係から独立した事実に対してのリアリティの強調という構図、そのような対立を作っているのは誰なのか、という内容を発表いたします。というのは、西

倉先生のご発表は、そういう対立構造に引き戻されることについての問題提起だったかと思うんですけども、誰が戻しているんだろうかという点に関して、いくつか引用させていただきたいと思います。

私はごく平凡な社会問題の構築主義的なアプローチを採っております。と言っても、恥ずかしながら社会学の勉強をしてこなかったのですが、唯一まともに出ていたゼミの先生が社会問題の構築主義をご専門にしておられたからです。それに絡めて、本日の私の報告の結論を最初に申し上げておきます。本日の問題設定である実在性と構築性について、ごく単純に言いますと、私は構築された事実の実在しかないと思っております。

ということで、これから内容に入っていきます。レジュメの2ページ目をご覧ください。

桜井厚先生の非常に有名な本、『インタビューの社会学』では、インタビューの場面それ自体が社会的現実の構築の現場として捉えられる。したがって、そこで構築されるライフストーリーの内容は、インタビューという相互行為といかに関連しているのかが重要な問いとなる。とりあえず相互行為というやりとりとインタビューの内容は、一応別個のものとしてここでは考えられていることが、ここからわかります。それから、そのしばらく後のところで、「個人的な語りをいかに正確に記録したとしても、実際に起こったこととして読まれるものではなく、現在の時点からの語り手の解釈である」とある。ちょっと飛ばします。「すなわちライフストーリーは、それぞれの価値観や動機によって意味構成された極めて主観的なリアリティである。そうした主観的リアリティをライフストーリー法は研究目的としている」これは対話的構築主義的なライフストーリー研究の研究対象ですね。

実は私、この「主観的リアリティ」なるものに関しまして、最初に読んだ時点から非常に疑問でした。というのは日常生活で私が、「君、それ主観的だね」とか、「それはあなたの主観でしょう」とか言うときに何が言いたいかというと、「あなたの主観的なリアリティを私は尊重する」ではなくて、「何か君の言ってること変じゃない？」と言いたいときに、主観的という言葉を使うように思うからです。あるいは調査場面において、私がインタビューに「それは主観的じゃないですかね」だなんて……ちょっとよう言えんという気がします。対話的構築主義を採っている方々は、実際の調査場で「これは主観的なリアリティだ」なんて思いながら調査なさっているのでしょうか。仮になさっていないのであれば、仮に桜井先生が例えば滋賀の村落で調査をされてるときに、「これは主観的なリアリティだな」なんて思いながら調査されていないのであれば、方法論を語る際に限って「主観的なリアリティ」なるものに注目されるのはなぜなのでしょう。

そして、主観的と客観的という区分も、やはり先ほどの内容と同じように、違和感がございます。個人の体験は主観的なんでしょうか。それを描写することは主観的なんでしょうか。主観的なものと客観的なものは別で、その2つは対立しているという発想がないと、「主観的なリアリティを研究目標としているので、真実を探究するのではない」とは言えないのではないかと思います。

さらに言いますと、この「解釈」という言葉ですね。現在の時点からの語り手の解釈を再解釈するとか、そういった表現につきましても疑問がございます。もう10年ほど前に鶴田幸恵先生と小宮友根先生が発表された論文で、「構築されている」、「解釈されている」というタームは、語られたことが事実ではないという概念を背負わされているように見えてしまう、と指摘しておられま

す。

それからさらに、近年の倉石一郎先生の文章でございますけれども、そこには「多角的アプローチと称される実証主義的立場からの対応、すなわち語りの外部に位置する文字資料やオーラルデータを参照して語り手のあずかり知らぬところで矛盾やずれを解消しようとする姿勢」を桜井先生は退けていると書いていらっしゃいます。この「語りの外部」って何でしょう。私にはちょっとわからないんですけれども。実は先日の発売された『現代思想』を読みましたら、私が博士課程1年生のときにうっかり勢いで書いた論文を引用していただいていた。彼女これは私のことなんですけれども「彼女が言う事実は語りの外側にあるものです。それは体験とも違う。体験の外側にあるものです。したがって、最後にその事実性を決めるのは研究者だという考えがあります。これは私の言い方では実証主義や解釈的客観主義の考え方に通じるもので、歴史学のオーソドックスな考え方です」と評しておられます。私は全然、自分が歴史学のオーソドックスな考え方をしていると思っておりません。オーソドックスを身につけられるほど歴史学を学んでいないからです。学びたかったのですが。「出来事の実実性がどうか押さえることは、少なくとも人々が生きている生活世界のリアリティを押さえることを基本的な捉え方としているライフストーリー的なスタンスとは少し異なる」ともおっしゃっています。やはり、ここでも出来事の実実性を押さえることと生活世界のリアリティを押さえることは、別のことだと書いてあるように読めます。

ということは、倉石先生や桜井先生は、語りの外側というものを——少なくとも誰かを批判する際においては——設定されていて、その際にリアリティを押さえることと実実性を押さえることは違うのだという発想をとっておられるのではないかと思います。

私自身、明らかに主観的なリアリティとしか言いようのないようなデータを扱ったことがあります。私の伯父の生活史を修士課程のときにインタビューしていたときなんですけれども、吹田事件という事件について伯父が語ったことがありました。これは大阪大学豊中キャンパスで日本共産党が主催した朝鮮戦争開戦2周年に合わせた6・25闘争という集会と、それに続く国鉄吹田操車場までのデモ行進についてのものです。伯父は1938年に韓国の済州島で生まれて、2011年に大阪で死亡しています。調査時点では70歳ぐらいです。吹田事件の起こった1952年の6月の時点では中学校3年生、14歳でした。

伯父がいろいろ話してくれて、私は、「ああ、おもしろかった」と思って帰りました。せっかくだから、吹田事件と言う名前だけはちょっと聞いたことがありましたので、図書館でいくつか吹田事件の本を読んでみたり、あるいは検察の特別資料が滋賀の某大学の図書館にありましたので、そこまで見に行ったりしました。すると、伯父の話と全く違うんですね。伯父が体験したと言っている吹田事件の、それこそ「主観的なリアリティ」と歴史的な吹田事件は全然異なっている。というか、歴史的にどうやらこうらしいとされている吹田事件というのは全然異なっている。例えば、伯父は関西大学の吹田キャンパスの運動場に集合したのだと言います。ところが、その他の資料では全て大阪大学豊中キャンパスに集合したのだと言っています。

経過も全く違います。伯父はまず、中学校の前に、自分と自分たちを指揮している先生と、友達10名ぐらいと集合して、電車に乗って、どこかは忘れたけどおりて、そこから山の中を越えて関西大学のグラウンドに行くんですけれども、その間に、あの家を燃やせと言われて2軒ぐらい家を

放火していて、ついでに破壊もしています。その後、関西大学のキャンパスの運動場で集会して夜を明かした後、今からデモに参加すると言われてキャンパスから出たら、すごくたくさんのデモ隊がいた。デモ隊に参加した。そうしたらトラックに乗った警察官がたくさん来た。でも火炎瓶を投げられて警察官は負傷したから逃げていった。その後、吹田駅に入ったら、吹田駅の周りは警察官がすごくたくさんいて、2発発砲があって、誰かに当たった。それで大混乱になったから、みんなで電車に乗って、そのまま吹田から梅田へ向かい、梅田駅でみんなで散り散りになって、それぞれ家に帰ったというような話をしておりました。

ところが、伯父の話以外の全ての資料、この時点では大阪には自治体警察と国家地方警察がありますが、その警察資料、参加者による回顧録、全て見ても、伯父の話とは経過も順序も違います。他の資料のいうところはこうです。参加者はまず豊中キャンパスに集合、それから二手に分かれます。電車に乗る人と山をこっそり移動する人です。もちろん警察は日本共産党が大きな集会を開くことは知っているので、集会参加者の動きをウォッチしていたんですけれども、二手に分かれて、警察の監視を分散させる目的で、後で1カ所に集合してから大きなデモ隊になって、早朝からデモを行うという流れになっています。

ただし、そこから後は、伯父の話と他の資料の記述とは完全に一致します。大規模なデモ行進をした後——トラックではなくてウィーボン車なんですけれども、まあ見た目は大きなトラックです——に警察官が乗ってやってくるんだけれども、参加者によって火炎瓶を投げられた警察官がやけどをして、その車は撤退します。吹田駅に入ったら警察官が取り囲んでいた。それもそのとおりです。警察官が2発発砲した。そのとおりです。誰かに当たった。そのとおりです。そのままばらばらになって帰宅した。これもそのとおりです。

このときに私は混乱しました。いろいろ可能性を考えました。伯父は他人の体験談を自分のものと勘違いしてるのではないか。あるいは何かほかの記憶とまざっているのではないか。けれども、私の伯父は全く本を読むことをいたしませんし、社会運動や政治活動にかかわることも、このあと一切ありません。吹田事件自体も、私が中学校時代の話をしてたら、「あ、思い出した」という感じでしたので、人にたくさん話しているうちに筋が変わっていった、ということも考えにくい。

伯父が私にうそをつく可能性もちょっと考えたのです。というのは、伯父はけっこう話を大げさに言う人で、例えば自分がいかに妻と子供のために働いてきたかという話をするんですけれども、実際に伯母に話を聞きますとそんなことはない。自分の会社はうまくいってると言うんですけれども、従兄に聞くと、どうもそうでもない。伯父は今風に言えば「話を盛る」人なんです。なんですけれども、この事件について私に大げさに言っても、何にも自慢にならないんですよ。

関大と阪大を間違えてるという可能性も考えたんですけれども、これは可能性として否定できないけれども、まあそんなに高くないだろうと思いました。というのは、後半あれだけ話された記述内容が一致している人が前半そこで間違えるかなという気もちょっといたしまして。

いわゆる「裏とり」、傍証探しもしたんですけれども、無理でした。伯父とともに行った中学校のお友達と会えないんですか、と言いましたら、交流のあった人は帰国事業で北朝鮮へ行ったと言われ、連絡が取れないということで諦めました。伯父たちを連れていった先生はもう亡くなっていました。在日コリアンで吹田事件に参加した人に話を聞いてみたいと思ったんですけれども、その

方は、既に回顧録に書いてある以上のことは知らない、と言われました。この方については、もう一回インタビューを試みて、言えないと言われたことがありますので、活動家でいらっしゃったこともあって、恐らく諸般の関係から「言えない」とおっしゃってるんだろうと思います。

それから、また日本共産党員で当時吹田事件に参加した方に、お話を聞きたいと申し上げたんですけれども、「自分は朝鮮人の方々が何をしていたか知らないから、むしろ教えてくれ」と言われてしまいました。八方塞がりです。

そこに至って私は考えを変えました。こうなったら、「伯父の言っていることはうそか本当か」ではなくて、「伯父の言っていることが全て本当なのであれば、この事件は何か」と考えることにしました。もし「主観的なリアリティ」なるものでないのであれば、この事件はいかに見えるのか、と。

そう思ってもう一度資料を見ると、吹田事件は、同時進行で、非常にたくさんの計画が発生しては潰れ、あるいは、そもそもやろうとしたけれどもうまくいかずに終わった、さまざまな計画の寄せ集めだということが見えてきました。その中で、日本共産党にとっても、在日コリアンの組織にとっても、あるいは警察にとっても、最もみんなにとってメリットの大きいプロットが「吹田事件」として採用されていったというプロセスが見えてきました。

伯父の発言が既存の資料と矛盾する、あるいは傍証を見つけるのが不可能であるというときに、この体験、経験、語り、何でもいいんですけど、彼の語った内容が、彼の主観的なリアリティなどではない。そして私が知りたいのは、やりとりの記録やリアリティの再構築ということでもない。そう考えなければ、少なくとも私の研究対象のデータは理解できなかったと思っております。

もう1点、ちょっと早口で説明いたしますね。別の語り手が、朝鮮半島から非正規に日本に入国してきてすぐに、闇米を闇市に卸して売る仕事をしていたんですね。それでお金をためていたんです。お金をためて何をしようとしていたかという、外国人登録証を買おうとしていました。

ある日、その方は敦賀駅まで行ったところで警察官に見つかります。「この米は誰のんや」「私のです」というやりとりをして、「これは闇米や」と言われて警察署に連れていかれます。取り調べに入るんですけれども、そのときに、仮にAさんとしませんが、Aさんは警察官に対して「自分はかつて朝鮮で教師をしていた。だから、戦争が終わったときに民族反逆者として追われる身になったので、日本に来ざるを得なかったのだ」と警察官に訴えたそうです。そうすると、警察官は同情的になって釈放してくれた、というエピソードを私に語ったことがあります。

ところがこの警察官に訴えた内容は、それまでのAさんの生活史の語りとは矛盾します。Aさんは確かに朝鮮にいたときは教員をしていましたし、子供たちに日本人になれるという皇民化教育をしました。学校において日本語を強制し、朝鮮語をしゃべった子供には札をつけさせて廊下に立たせるということをしていました。

が、彼はそのことで追われたわけではないんです。そこにはワンクッションあります。戦後、彼は、のちに親日派と呼ばれるようになった村の有力者たちが糾弾されるのを見て、震え上がって南朝鮮労働党に入党します。そして労働党員としてかなり活動してしまいます。逮捕されます。刑期を終えます。出てきました。すぐに日本にやってきます。つまり、自分のいた村を逃げ出して、日本に移住したわけです。だから、彼が民族反逆者として仮に追われたとするのであれば、それは

「日本語教育をして日本人になれと教えたから」ではないんですよね。

ということについて、そのインタビューを聞いている最中、私もAさんもわかっているわけです。この場でAさんが警察官に対してやったことは、「この嘘ならば、このハタハリならば効く」とその場で判断して、自分の経歴の中から都合のいいところをピックアップして警察官にぶつけたのです。それは効いたわけです。という武勇伝なんですよ、実は。

けれども、Aさんが本当にそう言ったのかどうかを判断する手段は私にはありません。警察官はもう生きていないだろうし、ビデオ映像や録音があるわけでもない。しかし相手は警察官です。Aさんがその時点で密入国者であることはわかっている、Aさんは外国人登録証を持っていない、そして闇米を売買していた。この時期の状況としては、そして警察官の仕事としては、すぐに逮捕・収容の手続をとるべきであったにもかかわらず、警察官はAさんを釈放しています。そう思うとたぶん、Aさんのハタハリは効いたのでしょう。そして、Aさんがそういうハタハリを、あるいは嘘を、警察官につくことができたのは、Aさんの置かれた、Aさんが生きてきたその歴史性のゆえです。

この2つの事例、どちらも「主観的なリアリティ」と言えば言えるんでしょうけれども、それを主観的なリアリティとして理解することや、あるいは、事実性を問わずに、あるいは事実性を検証する手続とは別個のものとして検討することは、私の調査対象にそぐいません。というのは、こういった発言から過去の記述から、現在の、あるいは過去の事実とされているもの、過去の事実だとみなされているものをひっくり返すことができないのであれば、私はインタビューなんか聞きに行かないからです。

いわゆる社会問題の構築主義というのは、私が理解する限りでは、ある出来事がかつて、人々によって構築されたプロセスの検証を含みます。それはなぜかという、過去の出来事、あるいは現在の出来事は、調査者にとって構築物である以前に、過去の人々によって構築されたものだからです。また、エスノメソドロジーの知見からは、データそのものとデータから導かれる知見とは同じ次元にあるのではないかとすでに指摘されております。「これらの研究はかつての反客観主義の伝統下にある思想や心理にかえて、社会的、テキスト的、相互行為的、レトリック的な実践や装置を据えている。これらに共通していることは、指示的もしくは表象的な言語化に捉われていることである。こうした研究は言語から切り離されたリアリティ、実在を保持し、その上でリアリティの外側に到達するときの言語的考慮や基礎的役割を強調している」。こう書いたマイケル・リンチは、対話的構築主義について書いているわけではありません。しかし、リアリティに何らかの事実、実体というのを想定した上で言語的な何かの役割を強調してしまっているのではないかと、という指摘は、対話的構築主義にも当てはまるのではないのでしょうか。

まとめます。データの、あるいは語りの内部や外部、あるいは倉石先生が書かれたところと言うと、「ライフヒストリー対ライフストーリー、事実の実在性対構築性、実証主義対構築主義」といった対立図式それ自体は、私は何ら意味のあるものと思っておりません。そして、事実の実在性、あるいは事実性を検討することと、その構築性、構築プロセスを検討することは、同じ作業であろうと思っております。データの事実性とは別個なものとして主観的なリアリティを指定してしまっている以上、それは客観主義に対抗して反・客観主義を、客観主義に対抗して主観的なものを、強



調してしまう。その結果、客観対主観という枠組みに乗っているのではないか。事実性ではなくリアリティということで、事実性対リアリティという構造をそのまま引きずっているのではないか。私には、事実の構築性、実在性とおっしゃいますが、構築されるプロセスの実在しかないように思われます。

以上です。

○司会（三浦） 朴さん、ありがとうございます。

今の話について、ちょっとこの所よくわからなかったとか、もうちょっと教えてとかいうのがあるかなと思うんですけど、いかがですか。

○笹部 お話ありがとうございました。関学で研究員をやっている笹部といいます。ちょっと最後のリンチのお話は何となくまだ理解ができてなくて、これは言語から切り離されたリアリティと言語的なリアリティがあって、前者に到達するためにはまず言語的なリアリティのほうを見なければならぬのだと構築主義やエスノメソドロジーの人たちは考えているけど、それって結局、客観性には2つのレベルがあって、もう一方のほうに到達するためには片一方も見なきゃいけないよと言ってる時点で主観と客観という図式自体はそのままになってる。つまり、客観性というレベルを一段ずらしているだけで、構図そのものはあんまり変わってないんだというリンチの解釈と理解してもよろしいでしょうか。

○朴 引用部分では、構築主義やエスノメソドロジーというよりも、それに影響を受けた研究ということなので、リンチは多分、エスノメソドロジーはそんなこと言っていないというのが言いたいんだと思うんですけども、それ以外に関しては私もそのように読んで引用したという感じです。

○笹部 ありがとうございます。

○司会（三浦） ほかにありますか。それじゃあ、朴さん、ありがとうございました。

それでは、次に、岸政彦さんをお願いいたします。題は、「物語／歴史／人生－個人史から社会を考える三つの方法」から、特にここでは人生を書く方法について……。よろしくお願いします。

## 物語／歴史／人生

### －個人史から社会を考える三つの方法－

岸 政彦

（立命館大学）※講演時は龍谷大学

○岸 岸政彦です。よろしくお願いします。朴さんがお子さんを連れてきて、殺伐とした会場が一気に和みまして、あの可愛さは若干反則ではないかと思えますけれども（笑）。いちおう私も、及ばずながらレジュメの最後にかわいらしいイラストをつけておきましたので、これで和んでいただきたいと思います。今日、何かプロレスのようなものを期待されて来られた方には申しわけないですが。

非常に勉強になりました。やっぱりこういうこと大事ですね。なかなかこういうガチの企画はなかったものですから、非常に勉強になりました。

多分、西倉さんが言ってることと桜井さんが言ってることもちょっと違うんですよ。西倉さんのお話しは、かなり穏当な形になってますよね。同意できるところがたくさんあります。だから私は改めて、やっぱりこういう場は大事やなと思いました。沖縄で何回も聞き取りしてると、「ストーリー」について書きたいことがいろいろ出てくるんですね。それは普通にありますので、やっぱりそういうこともちゃんと書いておかないとあかん、大事やなと、ものすごい思いました。

ただ、やっぱり方法論というものは、研究対象に対して相対的なのかなと思いました。方法論というのは、そもそもそういうものなのかもしれないですけども。

私はナイチャーなんです。マジョリティなんです。基地を押しつけてる側として沖縄に入り込んでいて、そこで話を聞いてるんです。方法論って現場が規定するんだと思ってます。

いまやってるのは沖縄戦に関しての聞き取りなんです。私の立場で沖縄に入り込んで沖縄戦の体験を聞いてると、それはやっぱり「語り」の問題としては、すごく書きづらいんですね。そこでは確かに調査者のリアリティが変わったりとか、思いもよらなかった語りが生まれるんですけども、最後に何か書くときは、事実としての沖縄戦というのはこうだったんだよということを書いてしまうんです。対話的構築主義は、研究プロセスを反省的に見る視点なんだ、と西倉さんはおっしゃいましたけど、そこに関しては僕は深く賛同します。本当にそれは大事やなと思います。ただ、やっぱり批判したいなと思うところは結構あります。

英語圏だと、実在論的なオーラルヒストリーが中心だそうで、かなり様子は違うらしいんですけども、日本語圏は桜井さんの巨大な影響があります。大体3つですね、オーラルヒストリーとライフストーリーとライフヒストリー。ライフヒストリーというのは僕が非常にほそぼそとやってるんですけども。オーラルヒストリーに関しては、朴沙羅さんからいろいろと教わっています。ただ、朴沙羅さんがおっしゃったことでもちょっと質問したいなということがあるんですけども、それはともかく。

オーラルヒストリーというのは、歴史的イベントとか出来事についての話を聞くわけですよ。事実を聞くと。語りというものを通じて、であるにしても、それは事実を聞くわけですよ。もちろん、事実というのはその都度暫定的なものです。それは当たり前だと。で、暫定的なところの事実を、そのつど聞き取って、書きとめておくわけですよ。その、暫定的なこと、いまの時点でわかっていることを書きとめておくことが研究であって、それは常に後からの批判に対して開かれているんですね。このようにして研究自体が共同作業で進んでいくということやと思います。語りというのは、たとえそれが歴史的イベントについてのことであっても、「まるごとの事実」ではありません。しかし、だからといって、そこから事実を「構築」できないわけではないし、みんなそれやっている。ストーリーに還元しているわけではない。

私自身は若いときに、桜井さんの勉強からはじめました。実は私は、桜井さんの滋賀の調査を、1年間手伝ったことがあって。そのとき三浦先生とも初めてお会いしたんですけども。ちょっとお手伝いをした、お手伝いといっても、現場についていただけですけども、わりと間近に見たことがありまして、非常に大きな影響を受けております。

ただ、そのあと自分ひとりで沖縄に入っていくと、すごくそれが実は、足かせになっていったんですね、調査の場では。対話的構築主義という方法は、ある語りや「リアリティ」というものが、どのように相互行為の中で共同構築されるかというのを記述するという、一言で言うところのことやと思うんですね。思想的なバックグラウンドに関してはポストモダニズムとかいろいろあると思うんですけども、あるテーマで聞き取りをしていて、その聞き取りの現場で、例えば聞き手が思いもよらなかったことが語られると。これも普通にあります。あるいは逆に聞き手の聞くことによって、語り手自身が思いもよらなかったことを語ることもあるんですね。そういうことを記述していく方法だと思います。少なくとも、桜井さんは、そういうことをしろ、と言っている。

たしかに、調査する方なら誰でも経験があると思いますけれども、インタビューが終わってありがとうございましたと言ったときに、逆にありがとうございましたと言われることも結構多いですよ。インタビューを受けて、昔のことを思い出せたからよかったよ、みたいな。自分の中でもすごい整理するきっかけになったんでよかったなみたいなことを言われることもあって、それを聞くと、インタビューってほんとに共同作業なんやなと思います。

聞き取りの場では、いろんなことが起きていて、それについていろいろおもしろい話もいっぱいあって、ほんとにはいまその話したいんですけど（笑）、ちょっと先に進みます。今日は残念なことに桜井さん来られてないですけども、桜井さんの方法論で批判されるべき点やなと僕が常々思っているのは、大体4つあります。ほんとにはもっとたくさんあるんですけど、今日は4つぐらいに絞って言います。

一つは、この対話的構築主義という方法はあくまでも、対話の研究、会話の研究になるんですね、やっぱり。しかし、インタビューでの会話、対話を再帰的に観察する、あるいは記述するというおこないと、その中で話されてることについての会話に「自分も参加して」、そのことについて述べることは、かなり水準が違うんじゃないかなと思うんですね。これは会話の研究としてはそれでいいんですが、そのなかで同時に特定の研究対象に言及できるかということ、結構難しいんじゃないかなと思います。

私たちはふつう、何かの特定のテーマや対象について調査して、何か特定のことを知ろうとしますよね。そして何か特定のことにについて書こうとする。だけど、対話的構築主義では、相互行為としてのインタビューにおける秩序を書くということをする。別々の論文でやることは可能かもしれませんが、ひとつの論文、一冊の本のなかでこのふたつのことを同時にすることは非常に難しいと思います。やろうとしてできないことはないですが、とてもちぐはぐな感じになるでしょう。今日の最初に三浦先生が、日常的な事実と歴史的な事実は違うんだよとおっしゃって、もやもやしてる方が結構いると思うんですけども（笑）、私はあんまり差はないと思うんですが、どのレベルでの事実でせよ、私たちは事実について調べて、書こうとしているんです。

やっぱり研究対象によっては、例えば沖縄戦というものがどのように語られているか、そのプロセスと会話を記述することと、沖縄戦そのものについて語るということは、端的にかなり水準が違うおこないなんじゃないかなと思います。もちろん、相互行為秩序の記述ということ自体は、立派な社会学的な研究対象です。問題なのは、本来は一緒にすることが困難な別々の方法を、どこかでこっそり混ぜこぜにしてるんじゃないかっていうことです。

二つめは、聞き手の現場で、聞き手側のリアリティがこんなふうに変化したという体験。これがとても重要視されますよね。たしかにこれは結構多いと思うんです。でもあるところで、それ自体ある種の研究者の、特に対話的構築主義者のモデルストーリーじゃないのって意地悪な書き方しちゃいましたけれども（笑）。わりとこういうのはよくある。でも逆に、思いどおりの話を聞くこともありますし、いろいろですね、やっぱり。これこそ一概に言えないと思います。

そもそもリアリティが変わること自体は、そのことを記述することを研究の目的にすることもできますが、ふつうはそれは、研究の出発点でしょう。私の『同化と他者化——戦後沖縄の本土就職者たち』という本、あれはいろいろそういうのが出発点になってるんですね。戦後の本土就職、沖縄からの本土出稼ぎの話ですけど、よくある物語があって、貧しい沖縄から、なかばだまされて人買いみたいにしてこっち（内地に）にきて、そこで差別されて、アイデンティティーに目覚めて帰った、みたいなストーリーを何度も聞いてたので、その印象を持って現地で調査した。そしたら、ほとんどの方が楽しかったよとか、復帰前はものすごい景気よかったよ、いくらでも仕事あったよ、ということを使う。沖縄でもいくらでも仕事あったけど、東京に憧れて、気軽に遊びに行ったんだよね、みたいな話がものすごく多かったんですね。何パーセントがそういう人とかはわかんないし、みんながみんなそうとは、全然言えないんですけども。少なくとも私が聞いた十数人はみんなそういうことを語った。そこで私自身のリアリティが変わる経験をしたんですね。それが私の出発点やったんです。それから十年かけて『同化と他者化』という本を書いたんです。

語り手との対話の場で、私のリアリティが変わった。そういう、変わったということだけでなく、いわば「変わったあと」の自分が、あらためて沖縄という対象「について書いた」んです。対話を経た、対話の後の、私のリアリティを書いたんですね、あの本の中で。そういうことで、対話の場でのできごとというのは、研究の出発点だなと思います。この方法論を採用する、わりと多くの方が、「現場で戸惑ってまごまごする私」について書いていて、そのことが論文や本のなかの大部分をしめるというものも多いですね。でも、私はいつも思うんですが、あなた自身がどれだけ誠実かということはどう十分わかりましたので、じゃあ現場でリアリティが変わった〈あと〉の話を書いてください、と思う。結局その対象について、いまのあなた自身はどう思うのか、という点を。これは、いうならば、対話の外に出る、ということになるのですが。

しかし考えてみると、「リアリティ」という言葉は、さっき朴沙羅さんが批判した点ですけど、確かに朴沙羅さんがおっしゃったように、日本語の文脈で「それは君のリアリティだよ」とか言うのと、結構あやふやなもの、単に主観的であるだけのもの、あるいは極端な場合には思い込みとかフィクションという感じになっちゃいますね。英語でリアリティと言うと、普通に存在とか実在とか現実とか、そういうあっさりした意味ですけども。だからよくわからない言葉ですね。

それから、三つめは、一つめに関係してるんですが、これも非常に意地悪な言い方になってしまっているんですけども、調査対象者との関係性の問題です。私たち調査者はふつう、特定の何かについて聞きに行くんですね。特定の何かが「どう語られるかを聞きたい」といって聞きに行くんじゃないですよ。たとえば、沖縄戦や、そのあとの戦後の生活が「実際にどうだったか」ということを聞きにいきます。調査をお願いするときもそのようなお願いのしかたをする。「対話のなかで沖縄や、本土、戦争、平和という言葉がどのように語られるか、そういうリアリティがどのように相

互行為のなかで構築されるかを聞かせてください」といってお願いすると、相当わかりにくいと思います。でも、「沖縄戦について教えてください」というお願いをして、話を聞いて、論文を書くときには、「それがどのように語られたか」について書く。もちろん、そういうことを理解できる語り手もたくさんいるとは思いますが、一般のふつうの方には、かなり理解してもらうのは難しいんじゃないでしょうか。すくなくとも私のテーマや対象だと、そういう聞き方はできないですね。このあたりを対話的構築主義の方たちはどうやって折り合いをつけているのか、興味があります。

ここではもうすこし沖縄に関して言わせてもらいますけれども、例えば沖縄の出稼ぎとか、階層格差とか、あるいは伝統文化でもいいですけども、沖縄戦でもいいですけども、そういうものに関して聞きに行くわけですね。そこでいろんな会話がなされる。いろいろ対話がなされて、こっちのリアリティも変わったりする経験がある。それを今度、その対話のプロセスを例えば論文に書いて相手に見せたときに、結構違和感があるのと違うかなと思うんですね。その違和感を表明するかしないかというのはそのときの関係性によっていろいろなので、みんながみんな、それを表明するわけではないので、これは一般論として言ってる、一般論というか、ロジカルな問題として言ってるんですけども。語り手の身になって考えてみると、何かについての話を聞きにきたあとで、何かについて自分が語った会話の記述を持ってこられるというのは、何かすごい違和感を感じるんですね。繰り返しますが、会話の記述や相互行為秩序の分析は、それはそれで非常に大事な研究です。でも、具体的な、特定の社会問題について調査をするとき、このやり方でほんとうにいいのかどうか、不安に思います。

四つめに関しては、そもそもの桜井さんの出発点はここやと思うんですね、やっぱり。実証主義と差別を同一視したんです、いちばん最初に。

差別って何やと。それはカテゴリー化やと。何か一緒くたにすることやと、カテゴリー化することやというのが差別やと。それは実は実証主義の人らがやってることと同じなんだよという意味のことを、「言語論的に転回した権力論」みたいなものにもとづいて書いてるんですね。そこがやっぱり、例えばライフヒストリーに比べてライフストーリーみたいなのがアドバンテージがあるんだという主張の、論理的なというよりも、非常に政治的な、あるいは倫理的な根拠になってたんですね。だから、出発点として非常に政治的な正当性の主張があって、それでわっと広がっていったような印象はあります。まず、実証的な、経験的な調査をすることは差別や暴力と同じだと言って罪恶感を与えたうえで、自分の方法を採用すればその罪から免除されるよ、というかたちで広まっていったんだと、極端に言えばそう思います。

競合する方法論があって、どっちがすぐれているかということを言うときに、実証主義は差別と同じなんだみたいなことを言ったことが根底にあるので、少なくともそのへんに関しては撤回したほうがいいんじゃないかなと思います。私は若いときからずっとリアルタイムで桜井さんの本を読んできたのですが、ここに関しての違和感は消えないですね、やっぱり。

何度も繰り返して言いますが、対話や相互行為の分析は、それはそれとして社会学の非常に重要な課題です。でもそれは、「そっちのほうが政治的に正しいから」という理由ではありえないと思います。

さて、批判ばかりしていてもしょうがないので、ここからは、私自身の方法が行き詰まっているところ、私の方法がぶつかっている壁についてもお話ししたいと思います。いま必死になって手探りで考えてるところです。2018年4月には勁草書房から1冊の本にまともと思うんですけども、方法論の本が。いま、ほんとに手探りで、1章ずつ『現代思想』などに書いているところです。

生活史、ライフヒストリーって言うんですが、じゃあ「ライフ」を書くってどういうことやねんと言うと、わかんないんですね、これが。ライフを社会学で書いて成功した人がどれくらいおるんやろと思います。

対話に関してはもうすでに蓄積されてるんですね。路線は違いますが、例えばエスノメソドロジーや会話分析なんていうのも、それこそものすごく蓄積が進んでるわけですよ。方法もどんどん洗練されている。対話的構築主義もすごい進んでる。

一方で、オーラルヒストリーも歴史学のなかでひとつの方法として確立されています。ポルテッリの翻訳も、朴さんがされましたけれども、有名な本もたくさんある。

この二つに比べて、ライフヒストリーのほうは本当にもう、何をしたいのかわからないぐらいの状態、私自身もほんとに手探りでやってます。全然成功してるふうには自分では思っていないですね。ライフヒストリー、私はいつも漢字3文字で生活史と言っているんですが、語り手がそれまで生きてきた「人生」について聞いて、そこからそれを考える、というやり方です。しかしいまのところ、何をどうすれば人生について聞いて分析したことになるのか、かなり曖昧です。

私は強い方法論と弱い方法論と言ってるんですけども、対話的構築主義は方法論として強過ぎる部分があるんじゃないかなと思ってます。もっと弱く、いちばん弱くして、とりあえず出発点として、生活史調査って何するのといったら、生活史を聞くことだよぐらいでいいんじゃないか。冗談みたいな話ですが。

これも半ば冗談ですけど、生活史調査の方法論って、例えばボイスレコーダーはオリンパスがいいよとか、けっこう茶碗やグラスの音とか響くからボイスレコーダーの下にハンカチ敷いたほうがいいのかのレベルでええんちゃう、って思うときもあるんです。あと手土産は1,000円ぐらいでとかね、学生の場合はかえって生意気になるので、ないほうがいいのか。キリがないですけども（笑）、こういう細かいことは、教科書にも書いたんですが（『質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』有斐閣ストゥディア）。

ただ、そうした、極端にシンプルな「弱い方法論」から出発するとはいっても、やっぱりすごく初歩的なレベルで難しいなと思うことがたくさんあります。これはこの間、社会学理論学会のシンポジウムにお招きいただいてしゃべったときに、赤川学さんと、本当そうだよなって言ってたんですけど、相互行為の分析で対話で書くのは確立してるんですね、いま。それから、例えば1000人、2000人で量的でやるというのも、当然確立してるわけですよ。でも、その中間というか、たとえばいま私がやってるような、35人に聞いて沖縄の階層について何か一般的なことを言う、あるいは、この次の調査をすでに実際に初めているのですが、それは沖縄戦と戦後の生活について、100人に聞く、ということを目指しています。この規模で質的調査をやるときの方法論がなかなかない。そういえばないよねということを、この間のシンポで赤川さんと言っていて、何とかしてく

ださいよと言うと、自分でやれと言われました（笑）。私みたいな頭の悪い調査屋が手探りでやらないかんことになってるんですけども、誰か理論系の人にかわってやってほしいと思うんですけど、本当に。まあ、そのレベルで「事実」をどうやってつくっていったらよいか、それがいまのところないということですよ。どうしたらいいかわからない。

それは、言い換えるなら、鉤括弧をどうやって外せるかという問題やと思うんですよ。たとえば復帰前の沖縄ってすごい景気よかったよという話を聞くわけですよ。それを聞いて、私のリアリティが変わって、その後どうしたかという、図書館とかに通って統計データをいっぱい集めた。それもいかなれば、ひとつの対話ですよ、やっぱりね。そういう対話をしていて、僕は自分の地の文で鉤括弧を外して、復帰前の沖縄はとて景気がよかった、ということを書いたわけです、『同化と他者化』の中で。

これは標本調査をして、そこから母集団をある確率で推定する、みたいなこととすごく似ていると感じます。語りというものは、それが語られたときには、鉤括弧がついてる。鉤括弧を外す、引用文を地の文に転換するというのは、サンプルから母集団を推定する感じと似てます。でも、一定の確率の範囲内で母集団の推定ができますよという方法は確立されてるんですけども、質的調査で鉤括弧をどうやって外したらいいのかというのはほぼない。捨ててる感じですね、そういう目標を、そもそも。一般的なことを言うのを、そもそもやめようということになってる感じですね。たぶん桜井さんは、この鉤括弧を外さずに、どこまでも引用文としてそれを扱え、と言ったのだと思っています。鉤括弧を外すのは暴力だということを言ったんですね。でもやっぱり、語りの鉤括弧を外して、沖縄というところはこういうところだと、私は地の文で語りたい。そうやって事実をつくっていくやり方を考えてるわけです。

そういう、もっとも基本的な、シンプルな、弱い方法論から出発することができたとして、次には、対象についての中範囲の理論が必要になってきます。このあたりも、方法論の範囲をすでに逸脱する議論になるのですが。対話的構築主義って、ちょっとこれも僕の誤解かもしれないと思うんですけども、方法論としては強過ぎて、ほんらい方法論がカバーすべきじゃないところまでカバーしようとしてるような気はします。いずれにせよ、方法論というものの範囲をどこまで広げるか、狭めるか、ということは、いつかちゃんと議論したいなと思っています。

いま、沖縄の階層と共同体というテーマで、共著の本を書いています。2012年ぐらいからやってる調査で、なかなかまとまらないんですが。最近、上間陽子さんが『裸足で逃げる——沖縄の夜の街の少女たち』（太田出版）というすばらしい本を書きまして、いまベストセラーになってますね。その上間陽子さんと一緒にやってます。他に打越正行、上原健太郎というメンバーで書きます。全員、質的調査です。生活史と参与観察で、沖縄の階層について書こうとしている。

沖縄の社会ってすごく階層格差が大きいんですね。ジニ係数で言うと、全国の都道府県でもっとも格差が大きいんです。

私の担当が、「安定層」、琉球大学なんかを出て公務員になってる方たち。上原健太郎が「中間層」、例えば高校とか専門学校を出て地元で介護職とか居酒屋やってたりする層です。上間陽子と打越正行は、「排除層」、あるいは「不安定層」です。風俗嬢とか、日雇いの労働者とか、そういうところで調査をしている。それまでずっと上原さんや打越さん、上間さんが調査をしていたことが、

合わせるとぴったりと沖縄の階層構造を（あくまでも「質的に」ですが）あらわす本になりそうだと。じゃあ一緒にやりましょうというときに、「それぞれの層で、沖縄の共同性というものがどのように経験されているか」というテーマでやろうかということになったんです。だから中範囲的な理論というか、まず沖縄社会に関する理論が発点になってます。沖縄社会についての独自の理論みたいなものが先にあって、それを調べて、考えて、それについて書くために、それぞれの方法が選ばれている。インタビューの現場で何が語られているか、ということは、出発点にはなりますが、ゴールではない。

沖縄社会のこういうところが知りたい、沖縄社会ってこうだよ、こういうところがあるよね、ここを言わないとだめだよ、という、「対象についての理論」があるわけです。

たとえば、社会学者でもそうなんですけれども、沖縄の共同性というのは、沖縄を語るときの大きなテーマになって、最近ではその多様性とか流動性も強調されるようになってきてるんですけど、いまのところ、私の知ってるかぎりでは、社会学者も民俗学者も人類学者もみんな、沖縄といえば共同性、沖縄といえばゆいまーみたいな感じで語ってます。一般の人になると特にそうですね。

それをもうちょっと相対化する必要があるということで、沖縄の中でも共同性に関してはいろいろなんだよ、多様なんだよということを言う意義があるというところから出発してるんです。

そうすると、調査方法というものが、テーマや対象に規定されます。例えば打越正行は、日雇いの建築労働者とか、風俗嬢とか、暴走族とか、闇金とか、あと風俗店の経営者とか、そういうところでやってますけれども、この人たちに対しては、参与観察しかできない。生活も不規則で人間関係も非常に流動的なので、あらたまってどこかの場所まで来てもらって、1時間なりのインタビューがなかなかしづらいです。だから、彼はほとんど一緒に生活してます。本当に十年以上、同じ関係性を維持して、日常的に接しています。上間陽子さんもそういう感じで。上間陽子さんはインタビューもしますが、基本的に本当に一緒に長い時間を過ごしている。支援活動みたいになって、何かあったときに一緒に警察行ったり、中絶するときに病院についていたりとか、そういうことをしてます。上原健太郎は、同級生どうして経営している那覇のある居酒屋を対象として、その開店前から数年間ずっと、インタビューや参与観察を続けています。私の対象は、公務員とか教員とか大企業の正社員で、メールでアポがとれるんですね。35人ぐらい聞きましたけれども、こうなると逆に、職場での参与観察はできないんですね。公務中になりますから。参与観察ができない。ひとりずつ生活史を聞き取るしかない。

沖縄といえば、みんな同じように共同体のなかでつながって暮らしていると、私たち社会学者もそう思ってるひとが多いです。せいぜい、あとから構築されるとか、多様なネットワークがつくられる、ということを強調するぐらいで、共同性というものが沖縄社会を理解する鍵であることにについては、たぶんみんな一緒だと思います。

でも、例えば共同体から排除されてる人も実はたくさんいる。逆に共同体の中で、例えば模合<sup>もあい</sup>（沖縄の頼母子講）のメンバーなんかが店のお客さんだったりすると、こういう共同体的なつながりが死活問題だったりするので、非常にそれを大事にしてる人もいます。それから、私が話を聞いた方々だと、地元の共同体からは距離をとってる人がいて、特に琉球大とか、あるいは本土の名門の



大学とか入っちゃうと、ここにいる皆さんもたぶんそうやと思いますけども、地元と関係が切れていくんですね。やっぱり大学に入っちゃう、あるいは安定層に入っちゃうと、もう合わないですよ、小学校、中学校の子らとは。そういう語りをたくさん聞いたんですね。それは35人聞いたんですけれども、もう例外なくみんな語ってました。共同体からはある意味で「離脱」しているんですね。

もちろん、こういう語りは、聞き手の私とのあいだの相互作用のなかで語られたものです。でもそれは、事実としての、沖縄社会のある一面をあらわしていると思います。相互作用のなかでつくられるからといって、何でも恣意的に語ることができるわけじゃない。

こういう語りを非常にたくさん聞きました。このインタビューで私がやったのは、35人全員の方に、自分の理論を最初に言ったんです。沖縄ってこうですよ、こういう研究をしたいと思ってるんですよとかと言うと、その通りだねとかって言われる。それこそ共同構築したんです。共同構築した「あとで」、私はその「構築した」事実について書くんです。

そのときに反論が来たりするんですね、「離脱」っていう言葉って、ちょっとどぎついじゃないですかねとか。実際に、語り手の方から、僕も模合やってますし、地元の友だちと仲良いですよ、みたいな反論をいただいたことがあります。そういうことがあって、ちょっと離脱じゃなくて距離化という言葉にしたほうがいいかなとか、いろいろ考えてるんです。こうやって、その場かぎりじゃない、長いスパンでのいろんな人たちとの「対話」を続けていく。

ひとつ、所属してる社会的なポジションでだいぶ生活が変わるだろうと、そういう当たり前のことを言いたいわけです。それは社会学者が、階層と言ったり、学歴とか文化資本とか言ったり、ジェンダーと言ったり、いろいろしてるわけですよ、地域と言ったり。そのなかの位置で、生活は変わってくるだろうと。それはよく見ると個人こじんばらばらで、それぞれなんだけど、何となくそういう違いって、「実在」するだろう、と思うんです。それは単に研究者がつくっただけの空虚なカテゴリーじゃないだろう、というのは実感としてあるわけです。沖縄に20年以上通って、沖縄との「対話」を20年してきたなかでできてきた、それこそ私の「リアリティ」(=現実)なんですね。それを書くということなんです。それをひとつの物語として、ひとつのストーリーとして再構成して書きたいんだと。書きたいんですね。書くということをしていたいということです。私は。

さて、まず極端にシンプルな方法論から出発して、その次に、対象についての中範囲の理論が必要だと。それで実際に、具体的な調査をおこないます。そして何かを書く。そのときに、まだ足りないものがあります。

たとえば、行為についての理論。生活史、ライフのヒストリーって何かと言うと、行為の連鎖なんですよ。数十年にわたる行為選択の連鎖として語られるわけですから。語られ方はいろいろなんですけど、基本的にこういう行為をしたよ、そういう選択をしたよという話の連鎖として語られるんですけれども、そういう行為の連鎖の、例えば動機であるとか、欲求であるとか、理由であるとか、原因であるとか、信念であるとか、こういうことを記述する言葉が足りないなあと思います。何とかもうちょっと、エスノグラフィーや生活史を書くときに直接役立つような「行為の理論」ができないかなというのはすごい思うところですね。この辺が、ぱかっと空白になってる感じです。

最後にまとめなんですけど、いくら実在論といっても、事実というのはその辺にあって、リングみたいになって、木の枝からもいってくるみたいな感じで手にはいる、って思ってる人は多分いないと思うんですね。僕もそんなこと思ってないです。僕らは事実をつくってるわけですよね。ある種言語論的な実在論というか、つくられた事実があるんだということなんですよね。

もうちょっと言うと、実在って言語の使い方の問題というか、概念が疑われずに使用されている状態のことやっていうこともできる。そうやって、言葉を使って事実を構築していかないとけないわけですよ、われわれは。やっぱり社会学者としての責任もあります。ナイチャーの社会学者として沖縄を研究することの責任があると思うんです。対話の記述では済まない、沖縄ということの中身について、何かを言わないといけない。

事実をどうやってつくっていくのかということを考えたいんですね。事実はつくられてるんですよと言うよりも、事実をつくっていきましようと言いたいんですよ。その事実をつくっていく、構築していくときに、せめて社会学の中だけでも共有できるような方法基準がないかなとか、どうやって事実をつくっていったらいいのかなというところで考えてるということです。

あと、語りと事実に関してなんですけど、これは難しいですね。基本的には、対話的構築主義というのは事実と語りを分けてないとおっしゃいますけども、私はやっぱり事実を語りに回収してるんじゃないかと思いますね。同時に、素朴な実在論は事実のほうに語りを回収してるわけで、なかなかひとつの理論言語のなかで、この二つのモードを併存させるのは難しいんじゃないかなと思います。

もちろん私も構築主義で、って当たり前ですけど、社会学者である以上は全員構築主義者だと思いますけれども（笑）、だから、ある特定の制度や規範や慣習や概念が、どういう歴史的なプロセスを経てつくられてきたかというのを、『同化と他者化』という本では書いたつもりなんです。本土就職という制度はどのように歴史的につくられてきて、当時の人々によってどのように経験されて、どのように意味付けされてきたか。ただ、つくられたものは存在するわけやし、それを逆に今度、社会学者がどうつくっていくか（＝書いていくか）ということの方法を考えていきたいなと思います。

最後に、繰り返しになりますけれども、僕も結構今日緊張して来たんですけども、西倉さんの話を聞けてよかったなと思います。別に白旗を上げてるわけじゃないですよ（笑）。確かに調査の現場では語りのなかでいろいろあったなと、改めて思い起こしました。ああ、やっぱりそういうことも書きたいな、という感じになりましたね。ただ、僕は沖縄ってこうだね、ということ、結局は書かざるを得ないわけですけどね。

以上です、ご清聴ありがとうございました。

○司会（三浦） ありがとうございました。

では、5分程度ですけれども、質問の時間をとります。オーケーみたいですね。それでは、これから20分ほど休憩時間とします。そのあいだに、後半のディスカッションに向けて、質問のある方は、事前に配布しました質問用紙に記入して、35分までに私の方へいただけるとありがたいです。

－質疑応答－

○司会（三浦） それでは、そろそろ時間になりましたので、質問タイムに入りたいと思います。

今日はいろんな意味でスリリングな展開がありました。まず来る人が会場に半分ぐらいあればいいなと思ってたのが、これだけたくさんの方が来られて、そして普通だったらこういう質問用紙ってちらほらしか出てこなくて、手挙げてくれる人もいないから、書いてもらったこれをもとにあの時間をつなぐというのがこれまでの1つのパターンだったんですけども、今度是对応するのが大変なほどたくさん、枚数も来だし、それからびっしりと論文的に書かれたものもあり、対応するのにも、またスリリングでした。

いま、それぞれの方宛ての質問を読んでもらっています。たくさん書いてあるものについては、最初に、質問内容をご自身に語ってもらって、質問者の言葉をみんなで共有したうえでお答えするという形式でいきたいと思います。

○西倉 質問ありがとうございました。すみません、十分にお答えできるものばかりではないんですけども、簡単なものから。

最後に私は、対話的構築主義的なライフストーリー研究は、どんなデータにも、どんなフィールドにも合うものではないだろうという話をしました。これについては、文献のところに挙げていますが、2015年に、これは桜井先生の退職記念の本だったんですけども（『ライフストーリー研究に何ができるか——対話的構築主義の批判的継承』新曜社）、そこに書いたことです。私のフィールドが広い意味での差別研究だったということと、あとは先ほど岸先生からもありましたけど、私自身があざがあるわけではないので、マジョリティに属する側の人がマイノリティに話を聞くという、その構図の中で起きた相互行為を理解する上では有効な方法だったんだというような限定をつけた書き方をしています。

それに関連して、モノログ的なインタビューには生かせないのではないかと発言したことに関して、そのモノログ的なインタビューとはどういうものなのかという質問ですね。聞き手はほとんど質問しない、あえてしないのか、できなかったのか、いろいろだと思うんですけども、語り手がほとんど独白的に話したようなインタビューの場合、語り手と聞き手の対話の痕跡はそのデータにはあらわれないわけですので、そこには対話的構築主義は有効に生かせないのではないかという意味で発言しました。

私の場合は、相対的に若い人がインタビュー協力者なので、あんまりその経験はないんですけども、例えば戦前、顔にあざのあった人とか、いわゆる奇形という状態で生まれてきた人が、治療の方法もなくどういうふうに生きてきたのかをインタビューで聞いたことがあります。その状況に関してはこちらは全く知識がないので、意味のある質問がほとんどできなくて、まずはとにかく聞いていることが重要なんだと思って、こちらから質問を挟むことはほとんどしなかったようなインタビューでした。それはいまだ論文にはできていないのですが、例えばそのようなインタビューをモノログ的と言いました。

私のほうでももう少し文脈を補っていただいたほうが答えやすいというか、フロアの皆さんと共有したい質問をいただきまして、静岡大学の荻野達史先生から御質問いただいてるんですけども、

書いてくださったことに関してお話しいただいてもよろしいでしょうか。

○荻野 たくさん質問のあるところでありありがとうございます。静岡大学の荻野と申します。

西倉先生がおやりになっているようなことは、インタビューのやり取りのなかで、言ってみれば、かみ合わないというか、語られてることがその場で結構わかりにくいとか、といった複雑性がある、要はその対話を子細に検討することによって、何がわかりにくかったんだろう、何がかみ合わない理由だったんだろうかということを見ていくことで、それまで見えなかった社会的な規範性とか差別とかというものを見出ししていくという、ある種分析的な戦略ではあるのかなと思ったんですね。

ただ、私自身もひきこもり研究をしてきて、インタビューデータの外側にある、あえて外と言っていますが、そのほかのデータというものを引っ張ってきて、その人が位置づけられていた社会的な歴史性とか社会的文脈みたいなものをインタビューデータを通して研究者として構成したいとか、構築して見せたいとかということってあると思うんですね。

つまり、インタビューで見出されたものを、一般化すると言っていいのかわからないですが、そうしたデータをほかからさらに引き寄せてきて、もう少し外側と言うんですかね、ある種社会的な文脈というか、そうしたものを研究者として新たに構成して見せる、たとえば、こういう社会的な流れがあったんだとか、こういう社会的な歴史性があったんだとか、そういうことを西倉先生、そして何か試みられたこととか、実際にやられたとか、あるいはこういうこともやってみたかったといったお話があれば聞かせていただけないでしょうか。

○西倉 御説明いただいたことはすごくよくわかるんですけども、私が今日持ってきたようなやりとりも、障害者に言及するというのは私にとってはすごくとっぴな例えに見えて、なぜこのレトリックで語るんだろうと思ったわけです。それぐらい彼らが障害者との対比の中に置かれているというのは、今おっしゃったような、その人たちが置かれた社会的な文脈ということではないんでしょうか。それ以上のものをおっしゃったのでしょうか。

○荻野 例えば、私はひきこもり研究をしていて、どうしてもその人の語りの中で議論を閉じてしまふとか、あるいは、自分なりの戦略もあったんですけど、いわゆる支援活動の機能みたいなものを探っていくという意味で、小集団エスノグラフィみたいになってしまったところはあるんですね。ただ、自分としては、何かその中で閉じてしまったという思いがいまだに拭い切れずにいます。

1つは社会学研究として、それを一定の時代とかそうしたものの流れ、もっと言うと、本当は歴史的な部分にうまく乗せたかったという思いを正直もっておりまして、それで西倉先生の対象に関して同じような歴史性を語るというわけにはもちろんいかなんですが、何かそうした部分はないのかなという、そうした意味です。

○西倉 ありがとうございます。

そうですね、その「閉じている」とおっしゃったことの意味はすごく自分でもよくわかっています。私のフィールドが比較的若いフィールドだということもあって、もちろん私の力不足もある上にフィールドの特殊性というのがあって、例えばユニークフェイスができて15年ちょっとで解散してるんですけども、今、同じようなインタビューをしたら、そのフィールドの成熟とか、フィール

ドでの問題の提起のあり方がどういうふうに変わっていったかという歴史的文脈を、今であれば補いながらやれるのかなと思っているんですけども、具体的なイメージはまだつかめていません。ありがとうございます。

○朴 質問を2ついただきましたので、手短にお答えいたします。

まず、「レジュメの3～4ページ、『主観的なリアリティがないからこそ意義がある』とありますが、ここで主観的なリアリティではないとされたのはなぜでしょうか」という質問をいただいております。

これは、私自身が「このデータは主観的なリアリティでないというふうに扱う」と決めたということです。インタビューした時点では、主観的なリアリティというより、「これは何だろう?」というのが正直な感想でした。なので、これを聞いた時点で、これは主観的なリアリティじゃないぞと[思っていました]。少なくとも、伯父が私にうそをついているとか、伯父が見当はずれな話をしているとか、そういった可能性はないんじゃないかなとは思ったんです。そもそもあんまり、主観的なリアリティということを考えなかったんですけども、論文を書くに至って、主観的なリアリティとして扱わないようにしなければ、私はこの伯父の語ったことを理解できないと思ったからです。お答えになっているでしょうか。

それから2つ目に、同じく主観的なリアリティに関してのご質問をいただいております。「主観的なリアリティに焦点化するとおっしゃっている西倉先生の御研究、あるいはご提案への評価をお聞かせください」ということです。

それからもう1つ、「ご報告のタイトルの「何が対話的に構築されるのか」は、反語ですか、挑発ですか」というご質問もあります。まず答えやすい、最後のご質問から回答いたします。

実は報告のタイトルがなかなか決まらなくて、研究室で「どうしようかな、何にしようかな」と思って本棚を見ていたら、『何が社会的に構築されるのか』という本が見つかったので、「これだ」みたいな感じで決めました。と言っても、その本の内容と私の今日の発表との関係がゼロ、というわけではもちろんありません。私自身も「何が対話的に構築されるんだろう」、「対話的構築」っていう時の対話ってなんだろう、「構築って言ってもあんまり構築という感じもしないな」、「対話してるんだったら対話って言わなくてもいいんじゃないかな」と、対話的構築主義的アプローチについているんなことを思っていたので、そういう気持ちをまとめてこのようなタイトルになりました。

それから、主観的なリアリティに焦点化するという西倉先生のご研究・ご提案への評価ということですが、西倉先生のような若手のホープでいらっしゃる方に私のようなものが評価なんて、そんな恐れ多いことはできません。

ですが、私自身がなぜ主観的なリアリティと言わないのかというと、私がデータをとってきた人たちの語った内容を主観的なリアリティと見なされてたまるかという気持ちが、強烈に、あるからです。

これは後でいただいた質問にも関係するんですけども、今日は伯父のインタビューを例に挙げましたが、私の調査はすごく狭いエリアというか、非常に身近な人たちが対象なんです。最初にインタビューをしたのは私の父の兄姉ですし、そのあとでインタビューをした人たちも、その人たち

から紹介された人たちです。

その人たちが、例えば外国人登録証がなくて、密入国者と言われてすごく大変だったとか、例えば朝鮮戦争のときにすごく大変な思いをして日本に来たけど、来たら来たでやっぱり大変だったとか、そういう体験というのは、話しにくいし聞きにくいものでした。密入国した——本人たちは「密入国」あるいは「密航」と言うんですが——非正規なルートで移住してきた人たちというのは、在日コリアンの中で——金大中・盧武鉉政権時に、韓国で真相糾明運動がすごく盛り上がったこともあって、ようやくその体験が聞き取られるようになりましたけれども——それ以前は全くそういう状況ではありませんでした。彼ら・彼女らは大変な状況を生きてきたけれども、在日コリアン社会でも、あんまり大ぴらには大変だと言にくい人たちでもありました。で、その人たちの体験こそが歴史だと言いたいんですよ、私は。

実は、修士1回生のときに1回だけ、太郎丸博先生の授業をとったことがあります。「私には無理です」と言って諦めちゃったんですが——太郎丸先生ごめんなさい。あのときに勉強しときゃよかった、とずっと思ってます——1回目で太郎丸先生がこうおっしゃったんです。「我々は究極的には政治闘争をしているのだ。大学にいる者にとって、その闘争の技とは学問的な知識である。君たちは、それをきちんと鍛えるのだ」。だいたいこんな内容だったと思います。もし違っていたらすぐ訂正します。太郎丸先生、会場におられましたら訂正してください。私は、「だよーね!」と心から思ったんです。いや、授業はドロップアウトしちゃって、ほんとダメ修士だったんですが。

ですので、インタビューに応じてくれた人たちの歴史や、その人たちの体験したこと、それを語ったこと、それが成立したいろんな条件、いろんな背景を明らかにすること、それを主観的なリアリティごときにとどめるわけにはいかない。それをもって大多数の、彼ら以外の人々の、歴史に対する認識や事実に対する知見をぶち壊して変えてやらないといけない。だから「主観的なリアリティ」だと、少なくとも私は今までの研究では言わなかったし、多分、今後とも言わないと思います。もちろん、「その意気込みで書いた論文が所詮はこの程度か」というご批判は当然のことでしょうし、私も自分で毎回、自分にそうツッコミを入れています。

あと、それから私と西倉先生両方にいただいた質問で、ライフストーリーとライフヒストリーについて「西倉先生・朴先生は、対立的に捉えることにあんまり意味を見出されておられません、お二人は岸先生のライフストーリーとライフヒストリーの区分についてどう考えられますか」というご質問をいただいています。

今の流れで私が先に答えちゃいますが、私は学説史上というか、出てきた順番上、ライフヒストリーとライフストーリーは日本の社会学の質的調査の方法論上は違うものだろうと思っています。

というのは、中野卓先生のライフヒストリー研究がまずあって、それに対して、「中野先生のご研究だと主観的なものどまりに終わってしまうんじゃないか」「じゃあどうしたらいいんだ」ということで桜井厚先生がライフストーリー研究を提唱してこられた、という順番だったと理解しています。日本の社会学で言うところのライフヒストリー研究とライフストーリー研究とは、注目するポイントも違うし、明らかにしなければいけないとされたポイントも異なっているので、学説史上は別のものではないでしょうか。私は、ライフストーリーとライフヒストリーを対立的に捉えるというよりも、おそらくは最初にライフストーリー研究が「ライフヒストリーはこれではよくないの

では」と言うところから始まったと理解しています。西倉先生、どうでしょう。

○西倉 学説史上出てきた流れというのは、今、朴先生が整理してくださったことで、私も同じ認識です。

岸先生の分け方に関しては、それを踏まえて言うと、中野先生流のライフヒストリーの研究とはどういう点に違う定義づけをされているのかをもう少し伺いたいと思いました。今後の課題として興味深く聞かせていただいたんですけども、3ページの下の方で、たった1人のライフストーリーの研究も結構出てきているし、1,000人単位の量的な調査ももちろん確立されているわけですけども、数十人で何か一般的なことを言うような、その中間の方法がないのではないかとおっしゃったことに関して、それは例えばベルトーがやってきたような、たくさんの人から聞いて飽和まで持っていくというやり方とは何か違いがあるのかどうかに関して伺いたいと思います。

○岸 自分の方法論を今つくってる最中で、例えば中野卓とどう違うのとか、谷富夫とどう違うのみたいな感じで言われると、なかなか難しいですが。学説史的には、まず中野卓が出てきて、そのあとで桜井厚が、という順番については、言うまでもなくそうだと思います。加えて、谷富夫も正当に評価されるべきだと思います。

中野さんの個々の作品、例えば『口述の生活史』なんかは非常に感動しましたし、『街の人生』という私の本のヒントのひとつになってます。彼があの本をああいう形にしたのは、コンビナートの風景の印象が強烈にあったからなんだろうと思います。多分、あのおばあちゃんの家に通って、おばあちゃんの家を出ると、目の前にはコンビナートがそびえてたと思うんですよ。ああいう風景を描くにはどうしたらいいのかなと思ってああいう形になったんだろうなと。何の答えにもなってませんが、すみません。

ベルトーに関しても、難しいですね。飽和という言葉は私はいませんけれども。

日本の社会学の教科書的な部分では、行為者の主体性とか創造性みたいなものがずっと言われていますよね。一方で、私が見たいなと思ってるのは、どうしようもない状況の中で、それでも生きていこうとする個人みたいなものです。やっぱり私たちは状況の中で縛られてるわけですよ。何でも自由に創発できるわけではなくて、ものすごく限られた状況の中で、限られた選択肢の中で、それでも頑張って生きてるんです。生活史を聞いてると、みんな限られた資源の中で一生懸命生きてるんだなと思いますね。

だから、社会によって私たちは縛られてるので、その縛られてるところを書きたい。縛られ方もそれぞれなんですけど、いわば、おたがいに「理解可能」な形でその縛られ方を書くことは、可能なんじゃないかなと思うんですよ。似た立場にいる人は似た人生を歩むということでは全然ないんですけど。何となく、逆なんです。ある立場に置かれた人はこういう人生なんですよということを書きたいとは思ってます。意外に、人生のそういう部分は、社会学でも書かれていないんじゃないでしょうか。境界線を飛び越える主体とか、あるいは相互行為のなかでそのつど構築されるとか、そういう話は多いんですけども。

このへんがちょっと自分でもまだよくわかってないところですが。こういう立場の人はこういうことをするんだよということを飽和とは言いたくないんですけども、パターンとも言わないですけど、何かしらそこに、規則性じゃない、何て言ったらいいですかね、社会性みたいな。

社会的という言葉って、真逆の意味の二種類の使い方がありますよね。何かが社会的だよねと言うときに、すごいカオスで、非線形で、自由で、恣意的でという意味で使ってる場合もあるし、それは社会的だよねと言うときに、めっちゃ社会的な規則に縛られてるよねと言う場合もある。両方書きたいな、というところです。

私も、繰り返しになりますけど、そのへんに落ちてる石ころみたいに、実在があるとは思ってないですけど、どうにかして実在を構築していこうとは思うんです。社会は実在しますよね。それを否定するひとはいないと思いますが。こういう言い方も誤解を招きがちなんですけど、事実なり実在なりを構築したあとには、私たちは、まるでそこに実在があるかのように振る舞うことは可能でもあるし、必要でもあると思うんですよね。私は、徹底的に「言語論的」に考えていった果てにいきなり出てくる実在論、みたいな感じが好きで、そういう感じで考えてます。

次、グラウンデッド・セオリーとどう違うんですかというご質問ですけど、これも難しいですね。グラウンデッドというのは、地に足をつけなさいよという話とは違うんですか（笑）。あれは、特に新しいことは何も言っていない、良くも悪くも「教科書」なんだと捉えています。

私の方法論で、事実性、実在性をどうやって確保するかというときにイメージしていつのは、プラグマティズムです。とても専門的に研究する能力はないですが、デューイ、ローティ、デイヴィドソンには影響を受けています。

あと、方法論が理論的な面までカバーしようとしているのではないか、ということをもうちょっと言ってくださいと。これは対話的構築主義のことですよね。

対話的構築主義の方法論が強過ぎることに関しては、確かに説明が不足しておりました。対話的構築主義の主張の中には、例えばリアリティとはどういうものであるか、ということが入ってますよね。単なる質的調査の方法論じゃなくて、もうちょっと拡張してって、例えば方法論の中にリアリティってどういうものかなとか、調査の社会的機能って何かなというのをあえて再帰的に組み込んでいく作業をしている。暴力とか差別とは何か。それはカテゴリー化である。実証主義的な調査もそれと同じことをしている。だから鉤括弧を外さずに引用文として扱うことで、事実に対応させない、つまり一般化しない。権力や暴力とは何か、という理論を立てた上で、それと共犯関係にならないような方法論を作ったんですね。非常に首尾一貫した体系になっている。

それは理解した上で、強過ぎる方法論をつくるとどうなのかというと、今度それに縛られるんですね。リアリティとは何か、権力とは何かというのが組み込まれてて、それに対して、それは対話の中で構築されるんだという方法論の中に入っていくと、対話から出られなくなるんです。

少なくとも、論理的にはそうなるはずですが、これは実は出てるんですよ、みんな。私は桜井さんの本の中では、『境界文化のライフストーリー』が大好きで、あれ普通の本、普通の本と言ったら叱られますけど（笑）、ものすごい普通の、民俗学にもつながるオーラルヒストリーの本やと思うんですよ。部落ってこうやねん。部落の伝統文化ってこうやねんというのを普通に書いてる。だからすごい好きで、あれの方法論のところのモデルストーリーがどうのこうのなんて議論、とってつけた感がすごいあるんですけど、でも傑作やと思うんです。

だから、不徹底なんですね、そこが。リアリティとは何か、事実とは何か、それは対話の中で、会話の中でつくられるから、対話プロセスを書きましようと言いながら『境界文化』ではほとんど



対話のことを書いてないんです。普通にこういう文化があるよみたいなことを書いているわけですよね。こういう結婚があつてとか。対話の外に出てしまっている。

どうして不徹底になるかと言うと、多分、この方法論の決まりを完全に守ったら、書けなくなると思うんですね。

どうにかして書くということを考えてるんです。書くにはどうしたらいいか。書くための方法論はどのような形であるべきか。それは、もっと弱い方法論のほうがいいんじゃないか。そこで事実性をどうやって確保するかとか、対象の媒介的、中間的な理論をどうやってつくるのかというのは、それはまた別のプロジェクトでやるべきであって、半分冗談ですけど、質的調査の「方法」って何かというと、やっぱり「レコーダーの下はハンカチを置いたほうがいいよ」ぐらいのほうが、ひょっとしたらいいのかもしれないですね。だから、方法論が強過ぎると書くのが非常に難しくなるんじゃないかな。書ける場合は恐らく不徹底なところがあるんじゃないかなということですね。

どこかで対話を終了して、ひとりになって私たちは書く仕事をしているわけですよ。書くというのは、これ以上ないぐらいの孤独な作業だと思うんです。自分の脳の中には誰も入ってきてくれないので、書くときは必ずみんな一人になるんです。ちょっと文学的なことを言っていって何言ってるんだろうって感じですけど、書くときには一人で書くしかしようがないわけで、その時点で対話が終了してるはずなんです。これは、たとえば草稿を事前に語り手に見てもらうとか、地元で報告会とかをしてフィードバックするとか、そういう手続き的なところでみんなで書いてるみたいな形にしても同じことです。パソコンに向かって指を動かしているその瞬間はひとりです。なので、対話をどこかで終了させてるということに関してはみんな共通してるんじゃないかと思います。抽象的な話ですみません。

○朴 「方法論が理論的な面までカバーしようとしているのではないか」という岸先生のご指摘ですが、実は私は、理論というものをどう位置づけるかということがわかってないところがあります。「じゃあお前は何を書いているんだ」と言われると、「いや、先行研究と関連づけているだけです」と答えるしかありません。社会学理論に結びつけてなんていう高度なことが私は全然できません。私の場合だったらレイシズム研究や、国境管理をテーマにした先行研究の、この知見に対してはこんなことがわかります、と書いてるだけなんです。

実はこの研究会の打ち合わせのときに、西倉先生が「最近は調査をメインでやっているの、方法論については考えることがあんまりないですよ」というようなことを、ぼろっとおっしゃいました。私は「へー！それ逆にすごい」と思いました。

というのは、私自身は調査が進むと方法論が進むからです。いや、方法論と言うほどちゃんとしたことでもないんですけど。調査が進む、データが出てくる、このデータをどうしたらいいんだろう、社会調査の本をもう1回読むか、という感じです。そうやって行き当たりばったりながらも、「あ、そうか、こんなこと言ってた、じゃあこんな感じだったらいけるかな」みたいな感じで、調査と方法についての考えは同時に進んでいくんですね。なので、私は方法論だけ一生懸命に考えていた体験というのはありません。調査だけ必死こいてやっていた時期はあるんですけど。

なので、「最近は調査をやっていて方法論が……」とおっしゃっているのは、やっぱり方法論になんらかの負荷があるんじゃないかと思います。あるいは、調査によって駆動される方法論という

のではないものを採用してしまったら、調査したって方法論が進まないことになるのかな、とちょっと思いました。どうでしょう、西倉先生。

○西倉 ありがとうございます。対話的構築主義が強い方法論かという、私は逆だと思います。私は語りを見るとき、こういう観点からも見れるんじゃないかという手がかり集のようなものとして捉えています。だから互いにどう関連するのか明確にはわからないような概念が1つの本に入っている場合もあるくらいで、むしろすごく緩い方法論というか、方法の提案というか、1つの方法なのかなというぐらいのものだと思っていたので、強いというのは私の捉え方とは逆ですね。

あとは、対話というのはインタビューの場面だけではなくて、もちろんテープ起こしをしているときとか、トランスクリプトを何回も読んでいるときとか、あるいはフィードバックをして相手の理解を得られなかったときとか、書いているときも、何かが確立されてから書くわけではなくて、本当にこれでいいのかともう一回戻ったりする作業をしているという意味では、書いているときもそういう意味では対話は続いているんじゃないかなと捉えています。

それから、朴先生がおっしゃったことはそのとおりで、方法論は調査の蓄積に伴うというのはそのとおりだと思います。正確に言うと、私はその打ち合わせのとき、調査だけやっていて方法のことは考えていないですと言ったわけではないです。今日、「はじめに」のところでも言ったんですけども、自分の手元にある今までのデータをもとに、例えば「障害の社会モデル」という考え方を再検討するとかいうことをしていたので、調査自体をそんなに集中的にはしていなかったのも、方法論を考えることもしていなかったという意味です。

これもちょっと言ったんですけども、今、従来の自分史を語るという行為ではなくて、アートと言えばいいのか、芸術と言えばいいのか、それを通して自己の経験を語るという行為に注目しているので、それにはまた別の方法が必要なのかなと考えています。まさに朴先生がおっしゃったように、調査によって方法論が立ち上がるというのはそのとおりだと思います。

○司会（三浦） それから、北田さんから結構長文の質問をいただきまして、それを解説することがなかなか困難で（笑）、深い内容ですので、ちょっと5分ぐらいに質問をまとめていただけるとありがたいんですが、いかがでしょう。

○北田 東京大学の北田と申します。どうもありがとうございました。

多くは西倉さんに御質問で、岸さんにこれでいいかという確認なんですが、西倉さんの御本はすごくおもしろく読んで、御発表に関してもほとんど違和感というものはなくて、むしろ『現代思想』のインタビューを読んだときにちょっと違和感を感じたんです。今日のお話に関しては何の違和感はありませんでした。

その上で逆に、こうすると事例分析になるとか、みずからの分析経験の再記述とか、そういったことをやっていくことは大変興味深いと思います。西倉さんが、分析者自身、あるいは「分析者」とかインタビューのなかでのカテゴリー運用とか対話プロセスの中でカテゴリー執行やその運用が変わっていくということ、そういったことに注目されることの理由はよくわかりました。

ただ、そのように対話のプロセスを追求していくのであれば、なぜ、それが「ストーリー」である必要があるのか。プロットを持つ物語である必要がなぜあるのかわからないのです。その線で行くと、エスノメソドロジーに移ってしまったほうが素直なんじゃないか、と。今日ご提示いた

いたトランスクリプトみても、当然ですが西倉さんの廻行的な物語になっているような気がするんです、逆に言うと。これをちゃんと——ちゃんとという言い方はこっちがいいという意味ではなくて——エスノメソドロジー的な相互行為分析にすることも可能だと思いますし、そうしない積極的理由がわからないんです。

それで、最後に岸さんがおっしゃったように、対話的構築主義は、「詰め込み過ぎ」、「実は理論負荷性が高いんじゃないか」「カテゴリーの暴力とか差別の問題性とかを実は組み込み過ぎている」んじゃないか、という疑念が湧いてくるわけです。少なくとも桜井さんの研究に関しては。そんなに理論負荷性の高いものに西倉さんがなぜ乗るのがいまひとつわからない。

西倉さんのやられてること実は対話的構築主義ではなくて、極めてエスノメソドロジーとかの相互分析に近い側面があるんじゃないか。そうすると、ストーリーというお話に持っていかななくて——廻行的な語りは再定式化として処理できますし——、十分に実証的かつ興味深い、重要な、「社会的な」分析になるのではないのでしょうか。これが1点目です。

第2点、重なる論点ですが、エスノメソドロジーとは、単に会話分析で、対話とか相互分析を実証的に転写してるわけではなくて、場面におけるトピック化するひとびとの方法、行為者自身がどういうふうに、なんらかの指し手（move）を通して、それによってどのような行為を達成しているのか。先行行為の解釈という捉え方ではなくて、いかにしてそういったものが理解可能・達成可能になっているかということ、そういうことを説明していくのが課題の1つになっていると思います。

そうすると、対話を素材とするというとき、なおさら、プロットを持つストーリーにすると「誰による／いかなる理解可能性を前提として／ある行為が達成されているのか」という問題がぼやけてしまうように思うんです。それから、これは不勉強でわからないのですが、ライフヒストリーとライフストーリーって、どちらもドイツ語にしたら同じ言葉かもしれないという気がするんですけど——川野さんもいらっしゃるので聞いてみたいところですが——実は根っこは一緒なんじゃないか。対話を素材とした物語構築の過程を調べるという試みは、それ自体「物語」ではないものを「物語」として再定式化する、という理論負荷性をもっていて、だとすれば、ライフヒストリーのように、相互行為場面に拘泥しない方法のほうが健全なのではないか、と思ってしまうんです。で実際、西倉さんご自身の書かれたものを拝読すると、そういう意味での対話的構築主義にこだわられてるようには思えなくて、もっとフリーに、自由に、「厚い記述」を目指されているように思うんです。その意味で西倉さんの書かれた本と、『現代思想』のインタビューが、私の脳内ではうまくつながらなかったんですね。生意気言ってごめんなさい。

それからもう一点、分析者と被分析者、あるいはインタビュアーとインタビュイーという立場の権力性、非対称性というものが大きな問題になっていると思うんですが、私、これ疑似問題だと思ったり思うんです。

基本的には権力の多寡とか非対称性とかではなくて、行為とか指し手が理解可能なものとなっている条件、行為者の合理性とか道理性を理解・記述する根拠の置き所、別の言葉でいえば合理性判断の準拠、そういったものの違いにすぎないんじゃないか。先行的に権力や立場の非対称性を立ててしまうことは、論点先取とも映ります。結果的にわたしたちが理解している権力関係として記

述できるとしても、それはいかなる行為秩序のなかでそのようなものとして達成されているのか、そこがまず問われなくては「権力」というそれ自体きわめて理論化の難しい説明概念を前提としてしまうのではないのでしょうか。

先ほど文脈の話が出ましたが、文脈に関しても、どの水準でその事態を説明する合理的な準拠枠（から絞り込み可能な文脈）を持ってくるかということであり、その相互行為空間のなかで、どういう文脈が使われてるかどうかということに着目するのか、分析者がそれを分析者なりの形で持ってくるのかということの差異であって、どちらが認識論的に上位、下位にある、ということではないと思うんですね。ただ、権力という説明概念を先取すると説明責任が大きくなってしまっているのではないかと思います。これは自分の問いが権力の行使なのではないか、という自省的な問いについてもいえることです。権力の行使として理解しうる条件を分析者が先取して決めることはいかにして可能なのでしょうか。

たしかに自己反省は美しいのだけれども、正直な話もうそろそろ、やはり2017年ですので、この分析者のポジショニングへの反省という論点そのものを社会学化していく必要を感じます。

さっき岸さんがおっしゃったようなことと重なりますね。西倉さんや山田さんがここで理解の類型をだされましたけれども、岸さんより西倉さんのほうが哲学的に見えるんですね。哲学的とはいっても、要するに理論負荷性が実が高過ぎるような気がするということです。そうじゃなくて、もっと実際の調査ではもっと適切な形で文脈のコントロールと解釈をされるるように思えます。

プラマーの生の全体性というものに関しても同じことで、何が有意義な行為で何が全体（文脈）であるかというのは、相互行為場面の指し手によってその都度変わるわけですね。あるムーブがなされたことにより、そのムーブを理解するための全体をどういうふうを設定するのがその都度変わるわけで、それはずっと西阪さんとかがやってきた相互行為分析の肝だと思ひ、いわゆる再帰性・相互反映性と言われてるもののエスノメソドロジ的理解だと思ひ。再帰性は反省的意識ではない。相互反映性とわざわざ訳されているというのもそのためだと思ひます。対象が物語として分析されることに適切であるとは限らないこともある。

それから、結果ではなくて、前提としての構えというのは非常におもしろかった話でした。ただ、ここは全然、私、どちらも専門でも何でもないので申しておきますが、「前提理論というものを持ちながら、それを訂正しつつ当座理論を創り出し、いろいろ議論していく」というのは、実はどの社会学者もやってることなのではないか。これは岸さんにも聞きたい……。

計量分析にしても、プレ調査やって、質問文の意味連関の分析をして、実査して、データクリーニングして、変数の有意義な——意味連関の見込める変数について——統制をかけて、それでも奇妙な数字上の連関がみられたら、常識的な論理に則って適切な手法を試行錯誤して模索し、課題を説明する「当座理論」を探り出していく。常識を逸脱する意外過ぎる説明は逆に眉唾なわけです。そのようにして、相互行為として、というか「対話的に」データ処理している。だけど、その過程書きませんよね。最終的には、まず仮説を書いて、方法を明示し、分析をして、結論を書く。ここでも数多くの意味的な「対話」がなされているわけですが、そのことは普通前面には出さない。これは岸さんの生活史についてもいえることです。なのになぜライフストーリーだと、そのプロセスを書くこと自体に学術的意味があるように思ってしまうのか、もしプロセスを描くのであればエ

スノメソドロロジーのほうが直球なんではないのか。ここが不思議に思うところです。

それから、髪の毛の薄い女性の笑いの話は興味深かったんですけども、例えば女芸人と言われるひとたちの構えを考えても、実は西倉さんの問題設定がジェンダー論やフェミニズムにある気がしていて、準拠問題的にも対話的構築の過程を描くことが主要な論点ではないように見えてしまうのです。

朴さんの話の中で出てきたマイケル・リンチの本では、基本的に先ほどから申し上げてる自己反省的な再帰性というものがずっと批判されてる。批判というか……代表的なのはブルデューやギデنزですが、要するに自己反省性みたいなものとして再帰性を捉えることを、リンチは鋭く問題化している。だけど、これ、リンチの中でもとても重要な点です。何で重要かと言うと、要するにそれはあるムーブを先行行為に対する「解釈」としてしまうような相互行為観、解釈として行為を捉えることによって文脈や行為いみの決定不可能性みたいなものが導き出されてしまうからですよ。その理論的前提は現になされている行為連鎖を分析するさいには、きわめて危うい。解釈は行為連鎖の方法のひとつ、再定式化として分析されるのであって、全ての行為を解釈として捉えることはコミュニケーションの実態を見誤らせてしまう、と。

西倉さんが目指されているものも、行為の連鎖、ムーブの指し手がどう関連していくかの分析なのか、それとも解釈の連鎖の解釈になっているのかがわからなくなってしまうところがあるのではないのでしょうか。ライフストーリーを対話的構築主義から捉えた瞬間に、実は人びとの相互行為を行為解釈の連鎖と捉えてしまっているのではないか。これは行為秩序の成り立ちの分析という目的からするとけっこう強い理論的主張を採用されていることになってしまいます。

結果的には西倉さんの御研究そのものが対話的構築主義というよりは、すごく王道的な直球のフィールドワークのように私は思いますし、……ユニークフェイスという問題に対する、ユニークフェイスという「社会問題」があるということが大前提に立って議論が進んでいたと思うので、なぜプロセスに着目するのかとか、対話的構築主義ということにこだわるのかということを少し御説明いただけるとありがたいです。

最後に、岸さんに。実在性とか、事実とか、実証主義っていう話をごちゃごちゃ過ぎるような気がします。実証主義っていう方法と、実在論という形而上学的理論は違う話なんじゃないか。その実証主義と実在論の関係がわかりにくいというのと、たとえば、実在論と実証主義と合理性に基づいた分析というのも必ずしもイコールではなくて、下手すれば仲が悪い場合がある。その仲の悪さをシュツとかが批判しちゃうわけですが、なんとなく非実在論的な、というか現象学な立場から、実証主義批判が生み出されてしまう。でも本当はシュツの類型の話とかを論理的に詰めていくとエスノメソドロロジーというある意味でゴリゴリの「実証主義」ともいえる方法にたどり着く。で、エスノメソドロロジーは別に非実在論という立場を繰り返す必要はない。実在論なき実証主義も、実在論なき合理性分析も可能なわけです。そのあたりを整理してお話いただけるとありがたいと思います。以上です。

○西倉 ありがとうございます。すみません、半分も理解できなかったんですけども、相互行為分析ならどうしてエスノメソドロロジーじゃないのかという御質問に対しては、相互行為分析が主目的ではないからです。あくまでそれを經由して、私はやっぱり経験とか人生を見たいと思っています

るので、エスノメソドロロジーはほとんど知識はありませんけれども、研究の成果はおもしろいと思いますが、でも自分がやってみようと思ったことはありません。なので、相互行為分析をしているというふうに、もちろんしてますけれども、何のための相互行為分析なのかというのがいまだに通じていないんだと、反省だけしててもと言われてましたけども、反省しました。

もう一つ、物語にこだわる必要があるのかということに関しては、今のことと同じで、ライフにアプローチするためには、ライフは手でさわることはできないので、語られた生から見ていくしかないと思ってます。そういう意味でむしろこだわる必要があるんじゃないかなと思っています。

3つ目、分析する人とされる人との関係について、私が権力を持ってたんだという話をしてるつもりはないんです。ただ、私のほうが調査者で、社会的にはマジョリティの側にいてという、それはそういう解釈にはなっていると思うので、そうなのかもしれません。ただ、題材として示されたものが具体例で言うとなんな分析になるのかがイメージできなかったのも、せっかく御質問いただいたんですけども、ちょっと後でもう一度教えていただいて、考え直したいと思います。

生の全体性に関しては、全体性とは何かと問うたらそうなのかもしれませんが、その生の全体性という考え方がライフヒストリー研究の文脈でどういうふうに出てきたかをそぎ落として理解することはできないんじゃないかなと思います。行為とか、役割とか、パーソナリティとか、態度とかに分解してその人を理解するのではなくてという文脈から出てきた言葉ですので、御指摘いただいたことはすごくわかるんですけども、ただ、ちょっと水準の違うことではないかなと思います。

あと、もう2つ頑張って答えたいと思います。プロセスを描くことに意味があるのはなぜかということについては、人の人生を理解するというのが、こういうプロセスをたどって理解したとか、このプロセスをたどらなければ理解できなかったという、まさにそういうプロセスなので、それを書くことにはライフを研究している以上、意味があるんじゃないかなと思っています。

先ほど御批判いただいたところともかわるんだと思いますけれども、フィールドから突きつけられた問いにどう答えるかというときに、そういう書き方、私が理解したことを私と同じマジョリティの立場で、恐らくあざがあることを美醜の問題だと思っている人に向けて書くことが、自分の調査研究にとっては意味のあることだと思えたということです。

量的調査でそのプロセス書くのが、ではなぜ意味がないこと、「美しくない」ことなのかはちょっとわからないんですけども、少なくともライフの研究としてはそういう記述の仕方、私が出た知見を別の人に向けて訴えていくというやり方はあってもいいんじゃないかなと考えています。

最後、リンチの指摘に関してですけども、インタビューは解釈の連鎖だと思っています。行為の連鎖ではなくて、私は解釈の連鎖だと思っています。応答の中でお互いに解釈をして、過去の出来事や経験が常に再構成されていくわけですので、それはやっぱり解釈の連鎖として捉えています。なので、エスノメソドロロジーに行かない理由とも少し関連してるのかもしれませんが。すみません、私の理解力と蓄積のなさで、今、この場でお答えできるのは以上です。

○岸 次に質問する人がしにくくなってないですか（笑）。私もいまのご質問、全然理解できてないかもしれないですが。

実証主義と実在論って別だねというのは、この間、北田さんとの対談の中で私が言ったんです

よね。エスノメソドロジーでも、「対話的」ではない）構築主義でも、非常に実証的な手続を踏んでるんですけど、なにかの実在に言及するというより、そういうものがやりとりされる相互行為秩序の分析ですよ。非常に抽象的なレベルになってます。実証的な手続をとって相互行為秩序を分析する。逆に言うと、相互行為秩序を分析することを実証的にやるということは実在論とはかなり離れることになるかもしれない。にもかかわらず、ユニークフェイスなり沖縄なりの特定の社会問題を主語にして語ってると、何か不徹底がある、首尾一貫しないところがある、ということを私は言っています。

対話的構築主義のやり方で沖縄戦が「どう語られるか」を分析するのであれば、それは徹底して相互行為秩序の分析をするべきであって、その場合は、主語の部分に沖縄戦を持ってくることはできないわけですよ、論理的にはね。「沖縄戦というものがどうだったか」ということは言えないはずだ。「『沖縄戦』というものがどう語られたか」「『沖縄戦』をめぐるどのようなやりとりがなされたか」ということしか言えないはず。鉤括弧がひとつ増えてます。

沖縄戦というものがどういうものだったのか、ということと言おうとすれば、それはそれで実証的な手続きが必要になりますが、その場合は沖縄戦というものの実在を——当たり前ですが——書いている本人も前提にしないといけない。この場合は実在しているものについて、実証的に分析するということになります。

本来はこのあたりのことについてもうすこし議論を整理すべきだったのかもしれませんが。私が今日言いたかったのは、対話的構築主義は実在論と実証主義とをごっちゃにして、その両方を「権力作用」であるとして断罪しているが、それによってそのやり方を律儀に守った場合には何も書けなくなってしまうはずだし、もし書いているのなら、どこかに不徹底なところがあるはずだ、ということに尽きます。桜井さんは、ご自身の方法を徹底するなら、部落というものはこういうものだ、ということと言えないはずなんです。でも言っている。なので、北田さんが、西倉さんは「普通の」フィールドワークをしている、というご指摘はとても重要だと思います。北田さんのおっしゃる通り、「ライフヒストリーのように、相互行為場面に拘泥しない方法のほうが健全」でしょう。

データを得るプロセスのなかで、研究者や調査対象者たちが、それぞれの当座理論を相互になんども調整しあって、なんとか「理解」というものを達成していく、ということは、おっしゃる通り私たちみんながやっていることです。とくに「対話的」と言われるまでもない。デイヴィッドソンが言うとおり、研究に限らず、理解というものはそもそもそういうものです。

こんな感じでいいですか。いいですかね。長くなるのでやめましょう、すみません。疲れた……(笑)。

○司会(三浦) すみません、書いていただいたご質問に、まだすべて答えられてはいないのですが、今までのやりとりを聞いて、最後にここを聞きたいというような方とありましたらどうぞ。

○朴 1個だけ答えられるのがあったので、それいいですかね。すみません、さっき答えたらよかったんですけど。「語り手と聞き手、語り手と読み手の間でリアリティが共有される」という西倉先生のご報告についてご質問を頂いています。「リアリティの共有とはいかなる事態なのか、朴沙羅の報告ではリアリティの共有が問題にならないのかのように感じられたが、その理解は適切か」というご質問です。

私には、リアリティの共有というのがどんなことなのか、ちょっとよくわからないところがあります。というのは、まず私は、調査をするときにリアリティを共有することを目的にしているからです。それに多分、リアリティの共有は不可能だと思っているからです。私のインタビュー対象者は70代や80代以上の在日コリアン1世のおばあちゃんが多いんですが、そういう方に、「お姉ちゃん、あんた、もうほとんど日本人やろ」って言われて、「日本人に言われたらどつくけど、この人たちに言われてもしようがないよね」と思って「そうなんです」と答えるときがあります。例えばその人たちが会話の中で、「そっか、お姉ちゃん、日本人と結婚したん。ほな優しくてええやろ」と言われたときに、彼女たちがそう発言する時のリアリティは想像できないんですよ、やっぱり。

70年前のことでもわからないんです。密入国して日本にやってきたときに、あまりにも貧乏だったから、病院にかかることができなくて、生まれたばかりの子供が死んでしまったという体験をされた方がいました。でも、彼女は私にその話を最後までしないまま亡くなりました。彼女は終戦直後に韓国に戻って、その後また大阪に移住するんですが、お子さんが亡くなったのはその大阪移住の直後です。私が彼女にインタビューをしたときに、彼女が「あんな思いするんやったら、戦争終わったときにずっと大阪にいたいならよかったんや」とインタビュー中ずっと言っていたんです。でも、私はその言葉の意味が、最後まで全然わからなかった。なんていうことがあると、やっぱりリアリティの共有は、私は最初からできるとは思っていないんです。できないけど、したいんだけど、たぶん無理だろうなと。こんなちょっと前の人、自分のおじいちゃん、おばあちゃん世代の人でも無理だからな、と強く思っています。

さらに言うと、私がそういう、語り手の体験を詳細に書くことで読者の方が仮にショックを受けたとしても、私はそれに大きな意味を見出しません。やっぱり学術書なので、でき上がった意義があるとしたら、できれば学術的な意義がいいなと思っているからです。実践的、政治的な意義というのはまた別水準でやったらいいかなと思っているので。

もう一つ言うと、私が調査をするときに知りたいのは、リアリティではありません。さっき岸先生が「事実と語りの関係は難しい」とおっしゃっていらしたんですけど、語りが成立する、あるいはデータなり体験、経験を含めて、そういった出来事が成立する諸条件を明らかにしたいのです。だから、仮に私がリアリティの共有に何か意味を見出すとすれば、それは研究の目的ではなく出発点です。この人がこのような体験をしたと述べているのはなぜか、それが成立するための条件は何なのか、この人が体験したと述べているこの出来事が成立するためには、いかなる歴史的な条件が必要であったのかということを知りたいので、リアリティの共有は、目標にしません。

以上です。

○司会（三浦） 最後に、あとお一人かお二人、5時までなんですけど、ないですか。

○梶丸 京都大学の梶丸です。飛ばされてしまった問いなんですけれども、どうしても聞きたかったことです。今日、主観と客観という話について、すごく闘わされてるんですけど、問主観性という概念は出てこなくていいんですかというのが聞きたかったんです。もともと皆さん共通への質問として書いていたもので、ちなみに、僕の質問は、その一言しか書いてないです。

○西倉 問主観性はないんですかというのは、どういう？



○梶丸 今日の議論の中で一言も間主観性という言葉が出てこなかったの、そこに若干違和感を覚えたので。その概念は社会学にはないんですか？ 私、人類学者なんですけど。ちなみにうちの師匠は年がら年中、間主観性という言葉を出してるんですよ。だから、今日、この主観と客観のその間とか、対話とか、いろんな対話をめぐるさまざまな概念が出てきたにもかかわらず、間主観性という本当はかなり中心的であるはずの概念が一切使われなかったのが不思議だなと思いました。

○西倉 ありがとうございます。私はリアリティが共有されて、その調査の場で共有されていくというのは間主観的なリアリティだと思っています。

○朴 私は主観も客観も間主観も使いません。例えば今、窓の外にゴジラっぽい生き物がギャオーと現れたとします。みんなが主観の中で「あっ、ゴジラだ」「ゴジラだ」と思って、それが重なってゴジラは間主観的に現れるのかというと、たぶん違うと思うんです。よくわかってないけど、もし主観と客観が問題になるとしたら、誰かが「あれはモスラだよ」と言った瞬間ではないでしょうか。「あれはなんだ？」となったときでもいいですが。うまい例えでもないんですが、主観・客観・間主観という区別を私はちゃんと考えられたことがないし、別に使わなくても研究はできていると思っています。

○岸 社会学で最近は間主観性って言わないですね、そういえば。とても大事な概念だと思うんですけど。どっちかというと、言語行為というか、ウィトゲンシュタイン以降は、例えば70年代ですかね、ハバーマスも意識哲学から言語哲学へというので、フッサールから後期ウィトゲンシュタインのほうに理論の中心をガツと動かししましたよね。社会学者はどっちかというと、その後、シュッツの研究されてる方も多いですけど、わりとそのへんの興味のある方は、どっちかというとエスノメソドロロジーとか、後期ウィトゲンシュタインとか言語ゲームのほうに移ったような気がしますが。間主観性は多分むちゃくちゃ難しいので、下手に使うとやけどしますから、私もよう使わない、というところがほんとに弱腰ですみません。

○梶丸 ありがとうございます。

○司会（三浦） 次の方、どうぞ。

○橋本 広島文教女子大学の橋本と申します。

岸先生に質問なんですが、先生の後半のお話の中でちょっと一言、飽和とかパターンとかという言葉は使わないんだというお話があったので、もう少し深く聞かせてください。それはグラウンデッド・セオリーの質問を軽くスルーされたこととも、恐らく関連してるようなので、……使わないというところを教えてください。

○岸 ちょっとグラウンデッドのほうは勘弁してもらっていいですか（笑）。ちょっと苦手なところなので……。あまり面白いと思ったことがないです。

○橋本 先生がおっしゃった。飽和という言葉、僕は使わない。そこもう少し深く聞きたいなと。

○岸 誤解をされると思うんです、パターンとか飽和と言うと。ぜんぶ一緒の結果が出てくる、みたいな。また同じパターン出てきたわ、みたいな感じになるんですよ。

ただ、何十人も聞いてると、ああこれは沖縄ならではの語りだな、とか、戦後沖縄そのものだな、と思うことがあります。そういうときは、なにか「共通の体験」みたいなものが語られていて、それをもって「飽和」ということであれば理解できます。それどころか、まさにそういう、沖

縄でしか語られないような語りを探している、と言ってもいいです。さっきも言いましたが、私たちの人生は、どの時代のどの地域の、どの階層に生まれるか、などによって大きく規定されていますし、たとえば沖縄なら沖縄というところで生まれ育って、内地とは異なる体験をする、ということがあるわけです。

ところが、対話的構築主義の方たちは、こうした「なにか共通するもの」に対する、あるいはよくなされる言い方でいえば「モデルストーリー」に対する、非常に根深い違和感、嫌悪感みたいなものがありますね。でも、モデルストーリーって語られ方がすごいいろいろなんですよ。沖縄の本土就職とかの、『同化と他者化』に出てくるモデルストーリーがあって、私はそれを「ノスタルジックな語り」って名づけたんですけど、あれも飽和といえれば飽和なんですけど、語られ方がすごいいろいろなんです。

いまやってる沖縄の階層格差でも、離脱とか、没入とか、排除みたいな経験について、似たような話がされる時があるんですけど、やっぱり語り方がいろいろなんですよ。思ってもみなかったような離脱のストーリーとか、今まで聞いたことがないようなモデルストーリーみたいなものが語られるのですね。対話的構築主義の方々の論文や本では、「調査者のモデルストーリーが現場の対話のなかで揺らぎました」という内容のものがとても多い。まあ、調査やってるとそういうこともたくさんありますが、それでもやっぱり「沖縄的な経験」というものがどういうものであるかを知りたいと思って調査してます。ある種のパターンがあるということと、それぞれの多様性があるということはおそらく、両方あって初めて認識できることやと思うんです。

ただ、やっぱりみんな一緒にくたにして、同じ話が出てくるよみたいになりがちなので、私は飽和というのは、あれで翻訳が正しいのかどうかよくわからないですけど、言葉のチョイスがあんまりよくないと思いました。それは何か違う言葉で表現したほうがいいと思いますけど、いまのところ私もちょっとよくわからないんですけどね。

だから、飽和もしないしパターンもないんですけど、でも他方で、私たちはそれほど切り離されて、一人ひとりバラバラになっているわけでもないという信念があるんですね。似たような経験をしている人はたくさんいるはずですよ。そうした経験を、おたがいに理解できるような形で書く、ということとはできるはずだ。

だから、そういう理解可能な経験があるんだよということと、それを私たちはいろいろな形で語るんだよということを何か同時に表現したいなと思ってずっと考えてるんです。いい言葉がないんですが。それを表現するのも、どうやって表現したらいいかわかんないし、『街の人生』みたいな、ただ並べただけみたいなことしかできないのかもしれない。

○司会（三浦） それでは、時間になりますので、これで今日は閉めさせていただきますと思います。

最期に、司会の権限でちょっとだけ今日の印象を言わせていただきますと、1回目の準備会が1月の終わりにあったんですけど、あのとき厳しい問い詰めがなされていた（笑）、リアリティって何ですかという所から始まって、それに比べたら、それを問い詰めていた岸さんが今日はリアリティって言葉をいっぱい使ってて……。こういうのはあれですよ、結構僕ら思い込んで、あいつらがちがちだとか思ってるんですけど、案外そう思ってた相手の人が結構緩やかにやってるという

(笑)、そういう感覚というのは僕はいいなと思うんですよ。

朴さん言われた何ですかね、あれを主観的リアリティとは言わせたくない。自分は最初そう思ったけど、途中からこれは絶対そんなもんじゃないと、言わせたくないというふうに、個人が判断できちゃう、これが問主観性では説明できないところかもしれない(笑)。

でも、今日でそんな解決がつくような話じゃないし、ただここで思うのは、ライフヒストリーとかライフストーリーという話を問題にしてきたけど、最後に出てきた、特に北田さんなんかが言われたような話というのは、ソシオロジカルストーリーを我々が一体どういうふうに解釈し、分析し、そして共有できるのか。あるいは、やっぱりエスノメソドロジーの立場と我々の立場は違うね、みたいに言わなくてはならないのかというような、そういう問題も並行してやらないといけないということがわかってきたということもあると思いますね。

でも、自己反省をし過ぎたら研究できなくなるからそういう考え方はやめようというのは、私個人としては、ある意味で逆政治性みたいのを感じてしまうのですが。

これだけの人が証人になっているから、今日の出来事はまた広く伝えられていくでしょう。2回目、3回目の公開研究会がまた開かれることを願って、これでお開きにしたいと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)